空 海 漢 詩 文 研 究 故 贈 僧 正 勤 操 大 徳 影 讚 并

中 谷 征

充

は U 8 に

で n Š あ え カン 吟 る な 故 事 味 艄 1 な 事 を 僧 どか 等 要 正 す 記 勤 5 :載さ る 操 が 大 徳 本 n 影 作 て 本 品 讃 11 作 は る 幷 品 空 事 は 序 海 流 は ま \mathcal{O} 麗 真 た、 な \neg 撰 性 駢 偈 で 靈 儷 頌 あると考 集 文 を 補 は 闕 用 仏語 鈔 11 える。 7 を多 V 巻 + る 用 に 名文であ L 収 載さ 畳 一 れ を多く る事 7 い る。 含 勤 操 む 空 \mathcal{O} 補 海 履 闕 歴 \mathcal{O} 鈔 漢 が 記 詩 所 0 述 載 さ 特 \mathcal{O} 徴 れ 作 て \mathcal{O} 品 よくで は 空 空 海 海 た七 自 \mathcal{O} 身 真 言 撰 L 古 カン カン 知

表 を 作 白 \mathcal{O} n 作 品 序 補 は 闕 鈔 を 勤 附 操 L 入 た 八 滅 もの を \mathcal{O} 制 後、 で 作 あ 約 る。 V 年 同 る。 後に 時 に 彫 勤 像 操 が 完成、 周 忌 L \mathcal{O} た 梵 時 網 に、 会に 勤 用 操 い 0 る 弟 子 表 た 白 ち 0 を依 依 頼 頼さ で、 れ 勤 て、 操 像 爲 に 先 対 師 す 講 る 釋 梵 讚 網 偈 經

巻

して

た に 空 先 海 0 貧 道と 青 年 表 公とは 白」 時 に が 蘭 虚 空 空 膠 海 なること春秋 藏 自 求 身 聞 \mathcal{O} 持 先 法 師 が 民民に久 \mathcal{O} 勤 伝 操 授 で () . を受けたと あ ると など 間 違 0 \mathcal{O} 0 記 伝 て 沭 承 解 が が 釈 あ 生 z り、 ま れ れ た事 た 海 など 勤 カン 操 5 لخ 0 得 長 度 年 0 0 師 親 が 密 勤 な 操 関 で 係 あ が るとさ 窺 わ れ、 さ ま

 \mathcal{O} 序 不 ځ 種 第 L 調 用 \mathcal{O} て 章 い 部 7 は で は 判 分 長 文に に 別 付 L 原 属す 文と L 易 た ぞし る。 書 た。 き 兀 下 平 段 L 仄 لح に 分け 対 は 対 旬 句 て \mathcal{O} 部 記 構 分 載 成 \mathcal{O} ず á. 押 句 末 韻 に 偈 付付 亚 ľ 仄 は七 た。 など 言二十 を 詩 記 Ļ は · 句 押 \mathcal{O} ;韻を付 語 古 旬 体 0 . 詩 解 Ļ でできてい 釈 平 を 行 う。 る。 序 不 序 同 は · 二六 約 は対 九 \bigcirc 句 通 \bigcirc に 字 傍 下 あ 線 り 連

 \mathcal{O} 第 注 章 書 で は を 参照し 本 作 品 な \mathcal{O} が 記 5 述 検討 に 基 す づ っる。 11 て、 最 後に ま ず、 空海 勤 操 勤 \mathcal{O} 操 履 \mathcal{O} 歴 両 者 事 \mathcal{O} 績 交 遊 等 を \mathcal{O} 検 実 証 態 に す る。 0 第 て、 本 節 作 で は 品 勤 に 空 操 海 \mathcal{O} 伝 が 記 承 に 述 0 て い て 1 古 る 両 来

者 \mathcal{O} 関 係 を 基 本に L て検 討 を 加 加えたい と考える。

勤 操 に 焦 点 を 絞 0 た 先 行 研 究 は それ ほど多く は な V) そ れ で多少とも 勤 操 に 言 及 L た 諸 論 文も 含め て、 者 が 目

L た 限 ŋ \mathcal{O} 論 文 を 次 E 揚 げ る。

A 花 山 信 勝 $\overline{}$ 岩 波 講 座 世 界思 潮 第 四 ₩ 空 海 __ 岩 波 書 店 九二 九 年 九 月 発 行

В 境 野 黄 洋 日 本 佛 教 史 講話 「奈良 佛 教 \mathcal{O} 繼 續」。 森江 書 店 <u>·</u> 九三 年 匹 月 発 行

С 守 山 聖 眞 文 化 史 上 ょ ŋ 見たる弘法大 師 傳 + 章 大師 لح 勤 操 大 徳」・ 廿 Ŧi. 章 勤 操」。

D 干 潟 龍 祥 弘 法大師 論教学との 関 係 ~密 教 研 究 第 五. $\overline{+}$ 号 九三四年三 月 発 行

Ε 辻 善 之 助 日 本 佛 教 史 第 巻 上 世 篇 平 安時 代 初 期 空 海」。 岩 波 書 店 九 兀 兀 年 + 月

F 福 Щ 敏 男 奈 良 朝 寺 院 \mathcal{O} 研究』「石淵寺」。 高桐書院 九四八年二月 発 行

Н 堀 池 \blacksquare 香 春 峰 融 醍 平 安 醐 寺 仏 教 蔵 勤 \mathcal{O} 操 研 究 僧 都 古 画 像に 代 佛 0 教における山林修 ** \ てし。 \neg 大和文華』 行とその 第二十 意 · 五 号 義」 九 九 五. 五. 八 年 年三 $\dot{+}$ 月。 法 蔵 \neg 南 館 都 仏 九 教 史 八 0 八 研 究

七

户 。

月

刊

初

版

法 蔵 館 に 所 収

G

蘭

Ι 池 田 源 太 石石 淵 寺 勤 操 と平・ 安仏 教 Ť, \neg 南 都 仏 教 第 五. 号 __ 九 五. 八 年 $\dot{+}$

池 \mathbb{H} 源 太 日 本 密 教 \mathcal{O} 成 成立と南 都 仏 教 Ě \neg 大 和 文化研 究 第 五. 巻 七 号 月。 九 六〇 年 七

月

K 堀 堀 池 池 春 春 峰 峰 弘 弘 法 法 大師 大 師 空 لح 海と 南 都 東 仏 大寺」。 教 __ \neg 弘 \neg 仏 法 大 教 師 芸 術 研 究 第九 吉 十二号 Ш 弘 文 館 • 九 七 九 七八 \equiv 年 年三月。 六 月。 南都 \neg 南 都 仏 仏 教 教 史 \mathcal{O} 史 \mathcal{O} 研 究 研 究 に 所 に 所 収 収

第 章 原 文 0) 構 成 書 き下 L 及 び 語 句 \mathcal{O} 解 釈

序

 $\left(- \right)$ 第 段 対 述 句 六 聯 る。 を含 龍 樹 む 駢 智 儷 文 藏 で 道 あ 慈と る。 続 仏 教 0) 論 布 0 教 法 لح 統 相 に 承 言 \mathcal{O} 及 重 要 て 性 11 を る。 陳 べ n に は 優 れ た 師 僧 が 必

帝

ま で

艠 能 濟 焉 御 人 車 者 能 不 運 能 焉。 致

柁 師 者 -元 △能 越 深○遠●

道

亦

如

之。

導

人者

教

通

教

者

道

る師無きときは深

きに越すこと能

わ

ず

能

わ

廢●

道

道●

百 會 未 誕● 瞻 部 聾 人 則 乘之 壅[△ 日●雷 教 無 演 則

部

不生

度

警

八

之

藏 所 童 壽 慈 謂 把投● 能 弘 道 支那 陽 谷 覺 識 斯 無 言 不 異●起●不 實 焉

> 般か は 能 濟た 車 は 能 運

柁が然 る に お、 御 す る 人無きときは Š 遠 きに致 す

亦た之の 人 無け 如 れ し ば 則 5 人 ふを 壅 瞻せが 導 部ぶり く は 教 教 な 演のり、 Š ること 教 を 通 ず 無 る け は れ ば 道 則 な ち 廢た る。

百 會 生 未 だ 延りま れ なば、 ざ れ 囙 ば、 度 八 不 0 乘 日 に 0 雷 瞽 に た 聾 り。 ず

童 ど子 壽 じ部 上れざれば、 はまっとけて たいまっとけて たいまっとけて て、 支那 無 起 を 覺 り、

所い蔵 謂。慈 ŋ て、 陽 谷 斯:不 異 を 識

人 能く道を弘 むと V . う、 0 言 實 なる か な

解 釈

0)

あ れ ごろう。 第 て 百 會 い 八 な 住 V) 心 は 百 鍼 | 會 で釈 釈 灸 尊 0 は 尊 用 の 医 意味を付 0) 語 学用 意 で 味 頭 語 で 0 であるから 加 頂 百 ぶしたの 上 會 に |誕| あ は空 るツ 本 華 平来釈尊 海の ボ 睿 (経 独自 \mathcal{O} 開 穴 意味 0 0) 用法であ 乗ョ乎三 名 が 称 含まれ で あ 草二 る。 てい と な 空 用 海 V は V また、 て いる。 秘 密 仏 曼 ここで 茶 語 羅 に は + なく、 Ł 住 心 文 論 釈 脈 尊 カュ と 0 6 尊 釈 秘 号 尊 藏 に 寶 \mathcal{O} ŧ 意 味

脈 黄 便 皆 内 Ę, 經 は果 明 於 堂 面 寶 撰 を見て 其 気氣 寶 鑰 至が頂 確認して 勘 註 = ょ い 今 以 ŋ な 引 百 V١ 數 て 導っ 黄 帝 也 内 經 とし 名堂。 7 い Ę る。 百 自 |會^人/ 注 0 割 頂 注 八上ニアル に 杲寶 者 身之尊 抄 載 未レ 也。 見 總シテ有 其 本 三三百 と記 듯 + Ŧi.

さ れ 7 瞻 い 部 る。 は 仏 語 乘之雷」 仏 教 0 は 須 仏 弥 教 Щ の を中 教えを雷 心とする に譬 世 えた表 界 0 3現で空 瞻 部 州 海 0) 事 独 で 自 イ の 言 F, い 0 口 事 L で で あ あ る。 る 釈 尊 は 南 瞻 部 州 に 生 ま れ

た

千 部 は 中 論 を 著 作 た 龍 樹 0 事 で あろう。 便 蒙 は 典 拠 と て \neg 摩 訶 止 記 載 0 如 龍 樹 作 Ŧ 部

論 L て 、 る。 不異、 を引いている。。 この章 不来にして不出と八不中 句 は 勤 「八不」 操 が三 論宗であるのでそれを は 仏 語。 道 \mathcal{O} 真 中 理 論 を 説 に 最初 1 表現 て 1 0 えしてい る。 縁 起 三 の理として、 る。 論 宗。で は 究 不生にして不滅、 極 \mathcal{O} 真 理 \mathcal{O} 姿を説 不常 示するものとして にし て不 断、 尊 不 重 12

であろ 錍 あ ぶろう。 0 うう。 壽 略として、 無起智」 は 無 鳩 起 摩 羅 典 は分別・ は グ拠 什婆 (kumārajīva)の漢 仏語。 を『大般涅槃經』 z 因果の れ た 切の 因 がなく果が 巻第八「如来性品第十二」 ŧ S訳7。「 のは 空であ 錍 生じ は ない り、 文脈 事。 からす 生起することがない ここでは、 ħ から引い ば 仏 教 \equiv \mathcal{O} 論 て、 教 と知る智である。 宗 え 0 \mathcal{O} 金 教 事 錍 義 であろう。 0) は仏法 空観を 0) \neg 表 喩として 便 す 蒙 無起 は 智」 錍 る。 0 は 事 適 切 金

لح 事 あ 日 で ある。 本 る。 慈 に充当す 我が 弘 古 は 来の 玉 \neg 便 が 蒙』 伝 á \neg [承で・ 故 Ō 日 指 は \mathcal{O} 太陽 摘 空 11 _ 海 ず \mathcal{O} [,]る国」 0 如 独 語 < 自の 出る処を云う。 我が と自 表現である120 玉 称 の 三 してい 典故 論 た 宗 「不異」 は『尚 ので、 \mathcal{O} 袓 師 書』「堯典」に「暘谷 この は仏語。 の智蔵10と道慈11の 典故を用いて、 非道弘人也(人能く道を弘む、先に説明した「八不」の中の 事で 寅賓出日 ここでは日 あろう。 (陽 本を指え 谷に出でる日 陽 谷」 L は てい 人 同 八を 弘 を 音 る。 。 の 寅 む 陽 み る 暘 に 谷」 け 非ら を 0)

るなり)」にある。 能 道」 \mathcal{O} 典 空海 は は 論 ば びこの典故を用い 衛 靈 |公第十五] てい に「人能 . る。 弘 道、 非道弘 道

【第二段】対句四聯を含む駢儷文である。勤

操

0)

俗

姓

出

身

地

لح

出

生か

6

入

寺

得

度

受戒

を

述

師

لح

修行

修

母 法 は \mathcal{O} 則 諱 5 は 嶋 勤 ション 操、 \mathcal{O} 俗 大 姓 和 は の秦州に氏 高 市 \mathcal{O}

玉 初 像 8 \mathcal{O} 母 氏 前 に に て、 嗣 無 香 花をもて誠 中 心之を を表 憂う。 わ Ļ 數 Þ 駕 精 龍 勤 寺 て に 息を祈 詣 る

な

玉 母 像 前 氏 無 香 嗣 花 表 誠 ਾਨ 憂 精 勤 數 詣 息● 駕 龍

寺

母

則諱有

嶋

史操傳

大

和 姓

州

高

市

也

勤

俗

爱

薪

者、

説

棄

法 夢 師 明 生 星 而 未 入 懐 幾 遂 耶 早 乃 弃 有 背 娠

露 無 歸 母 氏 掬 養

法 年 雲 甫 師 兀 +=, 則 千 年 秋、 勤 之之 就 大 有 也。 安寺 勅 於 + 宮 信 六、 中 靈 · 及山 大徳 渴 慕 階 閑 度 以 寂● 爲 我 千 厭 僧 師 悪 囂 塵

法

師

前りち千

勤

 \mathcal{O}

なり。

六に

L

て、

っ関

寂寂を

渴

慕

塵

を

厭

悪

比 遂 及 懐 治歸 弱 冠 Ż 思(親 教 數 躋 召、 南 [嶽之窟。 令受具 足

入 壇 之 後 就 蹟『同 寺三 論 名匠 善議 大

稟學二 論 之 滋 13 勤 經 + · 餘 年。

彼大 徳 皷 篋於 則 故 毗 入 唐 訶 之中。 學 法 沙 門道 攝 念於 慈 律 巖 師 藪 之裏●入室・ 也

不擲 寸 陰 二利 是 競

鶴 響 易 聞 高 天 聽 卑

解 釈 勤 操 \mathcal{O} 履 歴 に 関 す

> 師 生 明 星 n 7 \mathcal{O} 未だ 懐 に 幾 入 る ば < を なら 夢 み、 ず、 遂 養事那なに は 乃 早 5 < 娠 有 弃きり 背い

夜

法 Ļ 掬き

孤 露 歸 えるところ 無 母 氏 す

年 景 雲 甫 四 十二にし 年 秋、 て、 勅 有 りて 大安寺 宮中 信 · 及び 靈大: 山 徳 階 に に 就 於 < 11 て 以 0 千 て 僧 我 を 師 度す。

遂 に、 忘歸 比えの 思 V を 懐き、 南 嶽 0 窟 に .躋る。

む

弱 冠 に 及ぶ ほ ひ、 親 教 數 Z 召 L て、 具足を受け

入 論 壇 当の幽ら谷 後、 賾á 同 寺 0) 論 0 名 匠 善善 議大徳に 就

彼 0 \mathcal{O} 毗で大 ができる はた かん は を稟 則 ら 介け學 改入唐 び 學法 + 餘 0 年 沙 を 裏が門 勤 め し道 經 慈 たり。 律 師 \mathcal{O} 入 室 な

陰 を べたず、 一利是 を 競

公、

中

に

皷

篋

l

巖

藪

 \mathcal{O}

に

攝

念す

鶴 寸 \mathcal{O} 響 聞 え易く、 高 天卑くして きこ

á 語 旬 0) 解 釈 は 後 に 検 討 する 0) で、 そ \mathcal{O} 他 \mathcal{O} 語 句 0 解 釈を行う。

復 背 相 はそ 棄 背 ts. き投 とあ げ る。 捨 てる 仏 語とし 事 死 て ねこと。 も多数 用 典 いら 拠 は れ \neg て 毛 1 詩 る。 衞 孤 風 露 氓 は父を亡くし \mathcal{O} 序」 に 孤 児 氓 に 刺 な り、 時 也、 庇 護 す るも 華 落 0 色 が 衰

な V 状 態 を 11 、 う。 特 段 \mathcal{O} 典 故 典 拠 は な V が、 仏 語 とし ても 多 数 0) 用 例 が きある。

に な 千 る 前 勤 \mathcal{O} 段 は 階 千 の 人 \mathcal{O} 沙 サ 弥 ン ス 勤 ク IJ は ツ \vdash 便 語 蒙 「sāmaņera」 指 摘 \mathcal{O} 如 < 0) 音 勤 訳 策 0 沙 \mathcal{O} 略で 弥 あろう。 \mathcal{O} 漢 訳 で あ 勤 る。 策 は 七 歳 カン ら 二 + 歳 ま で \mathcal{O} 比 丘

塵 は さ わ が しくごみごみした所 で、 カュ まび す L い 俗 世 間 喧 騒 な 繁 華 街 0 事 典 拁 は \neg 春 秋 左 氏 傳 昭

年 近 に 湫 隘 景 に 公欲 して囂 更晏子之宅 塵 な ŋ, Ę 以て居 子之宅 るべ 近 からず、 市 湫 隘 と」とあ 囂 塵、 不 る。 可 以 ょ居 湫 险」 う あ 景 公晏子 土 地 が \mathcal{O} 宅 低 区くて狭 を 更き め W と欲 L つ て 日 \leq 子 0) 宅 市

二 十 ヲ 弱 日 レフ 冠 弱 は 男子二十 冠 三十月 歳に 至 日レフ り、 壮 冠を頂 有レリ 室。 É \vdots 元服すること。 に ある。 ここで 典 故 は二十 は \neg 禮 記 歳 で具足り 一曲 禮 戒を受け、 上の 「人生レテ十年ョ 僧 侶として 独 \exists <u>7</u> する 幼上、

弘 明 図幻 集 . 賾 巻 は 深遠 第 四 な 何 道 承 理 天 奥 達 深 性 V 論 ŧ の。 に 用 妙 例 思 は多くはない 窮 엛 賾 制 作 侔 が、 造 _ 妙 「弘明 思は 集』『高 滋 賾 を 僧 窮 傳 \otimes 制 制作は造化に作ふ) とあ 例 を挙 げ れ ば

ク IJ 學 ツ 記 皷 \vdash 篋 語 0) は太鼓 「vihāra」 を鳴らし 學一皷 0) 音訳。 (酸 スルハ、 学生を教 「攝念」 孫だが が、其! 室に は仏 集 ·業 め、 語。 也 文箱 心を集中 に を あ 開 る。 V させる。 て書 毗 訶 籍を出させ 褝 は 行する事 仏 語。 る。 毗 学問、 訶 羅 を始める事、 0 略 で寺 院 就学。 僧 坊 典 0 放は 事。 サ 禮 ス

而 易が失せ也。」 寸 陰 わずかな時 に引 11 てい 間。 る。 \neg 『便蒙』 適切で、 は 典 あろう。 拠 を _ 淮 「二利」 南子」 は 原 仏 道 語。 訓 自利と 0 聖人へ不ご貴 利他。 周 知されている語 |尺之璧|、 而 句 重 で 寸 あ 之陰 る。 時 難 得

ば ば 鶴 響易 用 V 聞 てい る 高 が、 天 聽 周 卑 知 \mathcal{O} は 動操の 毛 詩 修 小 行・ 雅 学業などの 鶴鳴」 0 盛 「鶴鳴于 名が 天皇に 九阜、 · 達 でするま 聲 聞 于 らでに 天 に 高 ま あ 0 る。 た 事 を 云 づう。 典 故 は 空 海 ŧ

第 段 でを 対 句 記 + 述 五. 聯 7 を 含 V る む 駢 儷 文で あ る。 弘 仁 兀 年 \mathcal{O} 僧 綱 入 ŋ カン 5 公 職 0 履 歴 仏 教 活 動 事 績 を 述 滅 ま

弘仁四年、抜以律師。

皇帝屈法師於大極殿、令講冣勝。

講

了

月

更

於

紫

宸

以公爲座主、即立義。集諸宗大徳、令舉旗皷、

仁四年、抜ずるに律師を以ってす

帝法師を屈して大極殿に於いて、取勝を講ぜしむ。

了の日、更に紫宸殿に於いて、

講皇弘

公 諸 を 宗 以 \mathcal{O} 大 0 徳 て 座 を 主と 集 め 爲 ず、 旗 皷 を撃 即 ち げ 義を立 L む つ。

職

悲

調

之 奔

感

也

悲

調

0

感

なり。

女

角

野

何 論 是 祖 冏 僧 君之宗、 釋 龍 猛 之 法 中 相 觀●則 臣 護 子 法 之 註 教 提 婆之

百 論。

並

皇帝 並 稱 歎 歸 之、 命 呵 即 闍 讓●任 梨 新 故。 小僧 扇舜 都、 時 敵 宗 兼 o造 名 風 将 東 寺 別 旗 当 靡

公公、 智 而 辨 恭 而 謙

今 上

噟

堯之

揖

南

導人不 倦、 濟 物 方便。

擢之大僧 人多嬰之守 都 雌 轉 造 西 寺。 云之忍 公、 辱 位 弥 高 志

逾

所 有 善 皆 鑚 仰。

或 勸 造 諸 寺 普

或 奏 調 設 漢 倭 老 僧 樂 曲 而○以●衣 詞 ▽沐 享 ▽浴 心 能 義 敬 仁○成○供△施●

吼 雅 音 佛 發心 I 聽者 名二 +絶 腸 花 毛 忌 迦 陵 産 定設會。 座 法 華二 者 百餘 死

乘無 慨 四 量爲衣、 有爲之人 住之騎 ん 緩 業 子•悉 唱 如 談 被三 爲 似 座 ●羅 此 不二。 空。

或 或 或 或 は は は は 漢樂を 老に 倭 造 回煖子を 勸え だねし を業悉くよ 曲 僧 を 奏し 調 衣 を 以て、 設して、 て、 能仁に て、 義成 諸 寺 に沐 祠享 12 心に敬供す。 普 <

三千佛名を禮すること二十一 を男 師 女 吼 角きの 雅 奔ょ音 せ は 聴者を始 て 發 心 絶 l 腸 花 せ L 年、 野 \otimes 産 迦 座 陵 を 0) 忘 \mathcal{O} 法 哀響は れ 華 · 會 を講ずること三百 を 設 見者を愛 死 せ 餘

 \equiv 論 は 是 れ 祖 君 0 宗 相 は 則 5 臣 子 0 教

び 皇 何 に歸 とな 一帝之を歎じて、 命阿 れ ば、 闍梨と稱 四 僧 う即 ち は 言する故 龍 小 猛 僧 \mathcal{O} にと。 都に 中 觀 任 を 時 じ、 釋 に Ĺ 敵 造 宗 東 護 0 法は 寺 名 別 将 当を 提婆の は 刃 兼 衂 百 ね

け

び

む。 灰靡

論 旗 を

註

今上、 堯の 揖 讓 を 膺 て、 0 南 風 を 扇ぐ。

公を以 て、 智に L 7 辧 恭 に L て 謙 な ŋ

を導くに倦まず、 物 を 濟うに方 便 あ ŋ

之を大僧都に 晏嬰の 雌を守るが 躍きい で、 如 し、 造 を 西寺に · 羅云の辱を 轉 はれず。 忍ぶに 公、 位 似 弥 Þ 高 < 志 逾い 下 れ

兀 量を衣と爲 ľ 如 を座 と爲 す。

無 住 \mathcal{O} 騎に 慨ゖ乘 つて、 此 0) 不二を唱え、

所 ^し有 有 ⁵為 0) 人 を い て、 彼 の 三 一空を 談 がず。

0 皆 **|鑚仰** す。

施 す

. 浴す。

若 如 克、 來 所 紫雲 使、 泛海 涌 非 ●塔●公 而 表 誰 农忠孝之感。 矣。 應

聲

韞響 無心 應 **怎**呼、 不簡 不論 貴 昼 夜●賤●現

於 戯 大士 如 知 弘誓、 醫 •王 逐 因 砂酔 狂 児 子 以 而 顯 滅 迹●影●

以天長 電影 此 界 難 憂 四年 苦、 駐 五 他境 幻 化 月 歡 七 誰 久。 喜。 日

春秋 於中京西寺 七 Ŧ, 北 夏 院。 臈 匹 + 奄 Ė 然化

以十 日 茶毘 東山 鳥部 南

是日 悼●有 勅 贈 僧 丐 悲。 詔旨慇懃

知 與 不 . 知 誰 不 哀 痛

九

重

哀

四

一衆含:

行

路

掩

尊 卑

爛

ると知

6

ず

٤

沒痛

肝。

涙●

若か れ ば 乃はは ち、

紫雲塔に

涌

V

て、

忠孝

0

感を表わ

如

來

使う所、

公に

非ずして誰

れ

於ぁ 戯ぁ 如

心

して扣

を待つこと、

貴

(賤を

育え

ばず。

昼夜を論ぜず。

・ 艇海に泛んで、 たたく

觀聲の應を現ず。

大 を無に めて呼に應じること、 は、

八士の 弘誓に 如知の醫王に の界には 声は、 憂 ~苦す 酔 狂子に因って影を滅 5児を逐 れ ども、 って 他 境 迹 に を は 類わ 一数喜す

影 駐 8 難 Ļ 幻 化 誰れ カュ 久 ĺ から む

む

電点此

天長四 年 五. 月 七 日 を以って、

中 京 西 寺 北 院に於 W て。 奄 然とし て化 L め

春 秋 七 Ť 夏 人臈四 鳥部では、

日 を以 って東山 讀離 12 茶だ 毘び す。

+

知 九 是 0 重 悼なり を か動 哀 み、 ŋ 7 兀 誰 僧 衆悲を含む。 が 正 を贈 せざらんや。 5 る。 詔旨 行 路淚 1慇懃 を 掩 た n n 11 尊 卑. 肝 を 爛だ 6 カン

す。

解 釈

紫宸 旗 皷 論 論 放殿での 宗は 是祖 は 労勢に 戦 君之宗(三 場 他 に宗との で用 なり いる旗と太鼓の 論は 0 論 0 議 是れ祖君 あ 0) 3り15、 席 #. で、 勤 \mathcal{O} 事 勤操 宗)」 操 である。 は三 が 以 <u>77.</u> 論宗 論 下 ここでは 派 た内容を 並 0 稱 衆望を背負 歸 南 命 都六宗 記 冏 闍梨故 述 L V. の僧に論 T 1 並 特に る。 び 法 に 議させることを戦争に擬 この頃は南都 相に対抗する立論を進めたのであ 歸 命 冏 闍 梨と稱 六宗の中で法相 する故 に)」まで して 1 宗が る。 \mathcal{O} ŧ 章

五.

に

あ

法 樹 相 法 宗 猛) 16は 相 を 是 宗 家 祖 (瑜 臣 君 や子 之宗、 伽 唯 仏 孫 識 教 泆 に 派 \mathcal{O} あ 相 は 大 た 則 龍 たると 成 臣 者 樹 子 没 لح 之教 主 後 L 張 お て、 L $\widehat{=}$ ょ て そ二 法 論 11 相 は る。 百 等 是 \mathcal{O} 年 n そ 後 南 相 \mathcal{O} 都 \mathcal{O} 君 理 六 世 \mathcal{O} 由 親 宗 宗 を次 ¹⁷の 及 び 法 に 論 真 相 対 言 は 句 等 宗・ 則 で カン to 述 6 天台 臣 ベ 派 子 7 生 宗 \mathcal{O} VI し 教)」 る。 た 於 宗 い と 派 て こは、 で ŧ あ 開 る 袓 カン 論 لح ž ら 宗 中 れ 7 観 論 い 宗 派 る。 を \mathcal{O} 祖 そ 開 君 れ 祖 لح に \mathcal{O} 比 龍

る。 \mathcal{O} 記 沭 冏 提 婆23 世 僧 L て 親 \mathcal{O} V \mathcal{O} は る。 実 兀 <u>同</u> 兄 百 で 僧 護 論 瑜 伽 法 伽 派 \mathcal{O} \mathcal{O} 21 空 0 は 注 基 海 世 釈 礎 流 親 を を \mathcal{O} \mathcal{O} L 築 略 唯 て 語 11 識 VI た。 で る 論 …を受け あ 0) \neg る。 で、 順 中 継 論 冏 註 1 提婆之 僧 だ唯 19 で 伽 識 龍 は 百 +樹 論 「asaṅga」 大 0 論 لح 師 中 記 0 論 述 0 l 人で 音訳。 て 0 11 注 あ る。 釈 「asaṅga」 る。 を L 大 て 乗 い は 廣 る 漢 百 \mathcal{O} 訳 論 で 釋 名 論 釋 無 龍 著 で 猛 龍 之 中 0 樹 事 觀 \mathcal{O} 弟 で لح あ

尊 团 L 崇 闍 7 0 梨 師 並 態 匠 稱 度 \mathcal{O} لح 歸 L を 表 命 持 現 て 冏 ĺ 尊 闍 L 崇 て な 梨 故 L 1 VI る て (並 び 事 L V る は カン に 明 Ļ 歸 述 6 命 ベ か 便蒙』 冏 で 闍 先 あ 梨と る。 \mathcal{O} が 主 一稱す 張 言 \mathcal{O} る 根 共 故に)」 拠 に 尊 L _ 崇 て は スト 11 瑜 之 る。 伽 也 唯 識 順 لح 派 中 指 0 論 無 摘 著 し て 大 • 護 乗 11 法 る 廣 が 如 百 共 論 釋 に 中 両 論 者 観 に 共 派 は \mathcal{O} 直 龍 論 接 樹 主 に に は 堤 婆 対 歸 に

命

炆

+ 南 風 る^{25c} は 舜 が 作 0 た とさ れ る天下 が 治 ま ŋ 民 \mathcal{O} 富 ts. 事 を 歌 0 た 詩 \mathcal{O} 題 辞 で あ る。 典 故 は \neg 孔 子 家 語 辯 樂 解 第

て が 弥 勁シャ V 晏 高 嬰 < 之 志 守 に 逾 愛さ 雌 晏 れ れ 嬰ネ ŋ る \mathcal{O} 雌 雌 0 \mathcal{O} を 徳 内 守 を 容 る 守 が を る270 具 如 体 L 的 ま た、 に は 示 典 L 忍 故 て、 を 辱 第 常 種 に で 用 晏 知 い 製26 5 て れ \mathcal{O} \mathcal{O} る 空 如 羅 海 < 云 無 独 0) 欲 自 よう で \mathcal{O} 質 表 に 現 素 忍 で 倹 耐 約 あ 強 る l 11 280 前 何 事 \mathcal{O} と、 章 に 句 勤 t 操 努 位 力 \mathcal{O} 弥 す 美 高 る。 徳 志 を 逾 柔 記 下 順 述 だ 位

う 兀 量 は 仏 語 兀 無 量 を 略 L た 空 海 流 \mathcal{O} 略 字 で あ る。 兀 0 \mathcal{O} 計 n 知 n な い 利 他 \mathcal{O} 心 で 慈 悲 喜 捨 を

如 仏 語 諸 事 物 が 0 で あ る 道 理 真 如 真 実 あ V) 0 ま ま 0

思

想

0

八

不」を勤

操

が

唱

導

してい

ることを

記

述し

てい

る

無 住 百 論 仏 語。 多 数 0 玾 用 を 例が 云う。 あ る。 ŧ \mathcal{O} 0 在 n か たに は 実体 が 無く 住 するところが 無 論宗 所 依 0 仏 典

唱 此 不二(此 0) 不 - 二を唱 え)」の 「不二」 は ここでは 一八 不 \mathcal{O} 空 海 流 \mathcal{O} 略 字 で あ る。 す な わ ち 論 宗 0 基 本

る 概 て、 事 以『是』三空法』為『三 念は カン で 36, 殆どは あ 空 る。 世 親 ゎ は三論宗 造 無 5 \neg 辯 性 \mathcal{O} 味 中 古 空 0 来 邊 解 と 同 論 所 \mathcal{O} 異 飛門」。 解 性空 依 じ事 B 釈 0 護 は 『般若経』 で空理を明確 適切 法 亦名"ケテ為『三三昧』」とある29。 自 造 性空」 でなな 一成 唯 で述べ V 0) 識 と思う。 「三空」とし にしてい 論』にでているもの30で、 られ、 空海 . る。 中 は てい 『大智力 · 論 느 論 る。 で \mathcal{O} 度 _ 論じ 立 近 便蒙』 論 場 来 6 で三 勤操 \mathcal{O} れ 初 解 は てい 品 解 じ から 釈 中 脱 もこ め、 る、 菩 門 す 薩 0 ń れ 古 空 功 意味 を 来 ば 德 論敵 踏 \mathcal{O} 無 釋 で用 襲 注 作 論 0) L 釈 第 無 V 法 て 書 + たと考 願) 相 11 は 宗 る。 に $\overline{}$ 眞 0) 無 えら 立場 別 L 相 諸 聞 カン 0 禪 れ に立 書 定 る。 解 法 を n 脱 事 除 中 門 6 な \mathcal{O} 0

如 來 品 義 第三」 成 は 一昔 切 Ħ 義 成 我 為 就 0 其 空 海 名--、 流 \mathcal{O} 號 シテ 略 語 日 釈 尊 切 つの幼名 義 成就 「siddha-artha」 「」31とある。 0) 漢 訳。 『父子合集經』 卷第三 淨 飯 王 致 禮

所 有 は 仏 語。 サ ン ス ク IJ ット 語 ∣ sarva J \mathcal{O} 漢 訳。 「あらゆ る、 すべ ての」 \mathcal{O} 意味 で あ る。

は二字 え b て れ 歸 詞 る。 熟 享 る。 語 性 は にしなけ 靈 祠 また、 享 便 蒙二 日 は ればなら 神 定 本 及び 古典 をまつること。 本 弘 文学 法大師· ない。 眞 別 大 聞 系 全 享」 書 集』 7 1)では、 特 \neg 私 段 注 字 の 記 記 典 \mathcal{O} 載 故 4 指 \mathcal{O} は 詞 摘 が 二仁 誤 な \mathcal{O} ŋ \ \ \ 和寺 を で 省き、 祠 享 あ 藏 用 る。 例 鎌 が 正 亨」 倉 が これらを 少な 初期写 L 0) みとして 本」「 勘 古 案す V 大 注 東急文 ,ると、 11 釈 、 る。 書 \mathcal{O} 庫 濟 L \neg 嘉 略 暹 カン 暦 注 し、 \mathcal{O} 編 兀 纂 対 年 集 時 旬 移 注 点 で カン 本 あ 6 など るか 及 写 び らここ 詞 享

能仁」仏語、釈迦(śākya) の漢訳。

師 吼 師 子 吼 空 海 流 0) 略 字。 仏 が 衆 生 済 度 0) 誓 願 0 ŧ 獅 子 のごとく 音 声 を 張 ŋ 上 げ 7 説 法 す

11

泇 陵 は 泇 陵 頫 伽 \mathcal{O} 空 海 流 0 略 字。 妙 音 を 発す る 鳥 0 名 ∣kalaviṅka∫ 0 音 訳

な 亦 非 愛 花 避 野」 根 彊 死 拠 也 は が は 死 見当たら 敢 花 を 愛 死 惜 と 野 L 以 な む 亂 V で 官 意 平 味 $\overline{}$ で 便 朝 蒙 是 あ 野 る。 れ は 亦 カン 典 た彊 5 都 拠 類推 鄙 は を 避 \neg L でくる 春 لح た空 秋 解 釈 左 に 海 非 氏 L 独 傳 てい ござる 自 0 \mathcal{O} る。 な 表現と思 何 り、 か 都 所 敢 と田 カン えて わ \mathcal{O} 舎」 れ 用 死 る 例 を で 愛ぉ 文 あ L 脈 る。 4 か 以 5 例 云えば 0 えば て官を亂さん 納 文公 得 で きる 年 や)」 が 傳 用 に あ 例 是 ŧ

斎 会を 忘 催 産 ず。 用 例 斎 な 会… L 僧 空 侶 海 独 食 自 0) 物 用 を供 法 か、 す る法 文 派 会 カン 5 考 えると \neg 便 蒙』 指 摘 0) 如 く 産 は 産 業、 日 常 0 生

蒙∟ لح わ 通 \mathcal{O} れ じ 考に対 應 た て、 を は 如 雲 現 事として 来 世 紫雲 ず す 涌 所 間 っる 篤い 使 塔 \mathcal{O} 涌 は 海 塔 表 は 対 に 、思い (忠孝之感(紫 る 未 用 句 観 が 詳 例 であ 音 が天に が とし、 0 根 な るが、 功 拠 徳 が 通じて、 が 雲 なく同 が 後 空海 塔 視期前 \mathcal{O} 仏 に 章 語 涌 が 瑞兆 旬 \mathcal{O} 何 た 11 は、 1故この て、 \mathcal{O} 如 で か。 た 或 あ 忠孝の 來 使」 V 鈔 る よう 典 紫雲が E 拠 0 \Box B な 感を表わ \mathcal{O} 意 くとし 表 用 対 味 塔に 現 例 旬 で を が は あ て勤 湧 見 Ū ぶろう。 古 き上 たの 当 操 Tたら と 解 渡 が カン 釈に り、 海 仏 ず、 神 陀 \mathcal{O} 筆 難 艇 入 時 語 衆 者 渋 泛 滅 漂 句 生 に した 海、 を 後 流 \mathcal{O} は に Ļ 意 救 そ 現 事 仏 味 ٧ì 0 觀 だけ が たい \mathcal{O} 意図 観 聲 教 窺 音力 わ 之 で え لح が 應 れ んを念じ を は 0) 読 何 弘 篤 神 4 通 لح い 取 艇 す Ł 海に て 願 n る 神 理 い な 人で 解 艇 が 泛んで、 \ \ \ 観 が あ 難 音 浮 勤 る 菩 か 操 てバ 薩 \neg \mathcal{O} 觀 救 便 忠

昼 扣 ること、 夜 対 を 旬 問 響 昼 無心待 わ 夜 ず を論 應 常に、 心呼」 扣 ザ ず)」 心 不 は を 簡 は 無に ず 貴 勤 賤 ħ 操 \$ L (心無に 0 用 た 状 人 例 Þ 態 が して扣がたたく に 見当 で、 対 Tたら する日 悩 を 待 4 ず、 事 に Þ つこと、 0 空 対 宗 海 L 教 仏 独 活 貴 \mathcal{O} 自 賤 動 0 教 えを説 表現で \mathcal{O} を 様 簡素来 子 ば ずし あ を き、 ろう。 描 写 助 韞 L け て を呼 響 應 1 · ぶ 声 呼、 る。 貴 不 に応えて 賤 論 なく全 昼 夜 暖 かく包み込 0 を 超さ 人に 8 た て 呼ぶ に て、 應 待

ŋ に 夶 導 句 き、 如 知 救 醫 済 する 王 慈 因 悲 狂 行 子 を 而 述 滅 影 ベ 三 「大士 て 1 る 弘 誓 逐 酔 児 以 顯 迹 は 勤 操 を 現 世 に 顕 現 L た 仏 Þ 菩 薩 に 擬 し 衆 生. を

加 知 は 仏 0 事 金 剛 頂 經 開 題 に 梵字 「tathāgata 」 0 自 注 に 如 来 如 去 如 知 とし 7 11 る。 _ 定 本 弘 法 大 師

言 は 全. 用 え な 例 が 第 四 な 巻、 七 空 海 五. 頁) この が 独 自 に 翻 訳 訳 L \mathcal{O} たの 如 か、 来 あ 如 る 去 V は は 便 「タ 蒙』 タ] \mathcal{O} ガ 指 タ 摘 0 \mathcal{O} 如 漢 < 訳とし 如 實 7 知 般 \mathcal{O} に 空海 用 1 流 . ら \mathcal{O} れ 略 7 字 1 な る 0) が、 カン な 如 知

狂 子 気 \mathcal{O} 狂 0 た 人 で あ る が 次 0) 酔 児 لح 同 じ < 仏 \mathcal{O} 教 え に 目 覚 \otimes て V な 11 凡 人 衆 生 を 意 味す

廻 を 滅 滅 がする 事320 仏 語 用 例 が 少 な V が 影 は 実 体 0 心であ る 現 世の 意味 で、 滅 影 は 業と煩 悩 に よっ て生じる生 死

弘 誓」 仏 語 切 衆 生 を 救 おうという 菩 薩 \mathcal{O} 誓。 菩 薩 0 誓 願

此 顯 界 迹 憂 苦、 用 例 が 他 無く 境 歡 意 喜 味 が は よく 勤 操 判 が 6 死 な 去 し 11 たこ 菩 薩 0) 世 \mathcal{O} 誓 界 で 願 に は 悲 依 0 L て、 み憂うが 酔 児 衆 菩薩として生まれ 生)を 救 う為に、 変 \mathcal{O} わ 世 0 に た 顕 別 現 0 す 世 る 界 事 0

人

Þ

は

喜

Š

で

あ

いろう。

死 例 去 は した 少 電 影」 な 勤 V 操 が、 仏 を指 語。 空海 L 電 て は لح 好 V 影 る。 λ Ĩ で 用 瞬 時 11 て に 消 11 る330 え去 る ŧ 幻 化 \mathcal{O} な 仏 0) で、 語。 実 人 体 間 \mathcal{O} ŧ 含め な いこと。 現象 界 ここで 0) 無常 は な る 電 事 影 0) 喩 に 幻 化 用 V 共 5 に、 れ て は 11 る。 カン なく 用

「九重」 仏 語。 Ì ij 語 ∫jhāpeti] 0 音 I 訳。 死 骸 を火 葬 すること。

陶 而 思 君 兮、 王 君 城 之門 \mathcal{O} 門 以 が 九 九 重 重 (造 かあ るので宮中を云う、 鬱 陶 して君を思わざら 転じて天子を指す。 Ĺ ゃ、 君 0 菛 九 重 典 を以 故 は 0 てす)」 楚 辞 とあ 宋玉 る 九 辯 第 兀 段 に 豊 不

0 肝 絶 腸 肝 をただら 断 腸 等 カコ لح す 共に ほどの 好 んで用 哀 痛。 い 用 7 例 V が見当たらな る340 \ \ \ 空海 独 自 0) 用 法 で、 喜 怒哀楽の 強 烈 な 感 情 を 表 現 す

弟子 第 冗 僧 等 段 顧 対 丁 旬 氏 六 之 聯 孝 を 感●含 む 刻于 駢 儷 邦 文。 讃 木● 偈 作 成 0 経 弟 緯 子 と空 Ö 僧 海 等、 自 身 丁 0) 氏 勤 \mathcal{O} 操 孝 との 感を顧り 関 係 を述べ、 Ź 于 哀 邦 悼 \mathcal{O} 0) 壇 意を 木 に 表 刻 む

縣 與 日 公 月 憑 春 詞 秋 余 翰

道 七 秊 戒●孟 蘭 膠 秋 率 諸 已 名 頂●僧 於 高 雄 金 剛 道

場

復 祖 耶 宗 是 沐 兩 法 部 派 灌 昆 季・

佛 城 何 早 之 歸 將●述 遺 我 間 如 之灣●然。 唾

含筆

欲

不

覺

哀 哉哉 悲 哉

而 説 阁言

述者 德廣 而 繁跡・ 道 淵 義●而 事

多多。

文含

貧 日 月 に 懸 け W たとうない L て、 詞とは を

余

 \mathcal{O}

に

憑た

む

翰な

道 لح 公 لح は 蘭 膠 なること 春 秋 E 久 し。

弘 仁 七 秊 孟 秋 諸 \mathcal{O} 名僧 を 率 11 て、 高 雄

余

剛

道

場

に

於

7

=昧 耶 戒 を 授 け、 兩 部 灌 頂 に 沐 す。

祖宗 は 是 れ に L て、 法 派 は 昆 季 な り。

況

P

、復た、

筆を含 λ で 述 べ W لح 欲 0 す Ś 覺 ええず L 7 潜ればん たり

佛 城 $\widetilde{\mathcal{O}}$ 將 間 \mathcal{O} 導

に 何 ぞ 早 く 歸 0 て 我 を 遺す 0 ること 唾

 \mathcal{O}

如

<

なる

哀 L 11 カン な しい カン な

廣 < かし てかとし 繁り、 道 淵か < L 7

事

述者之を蔽し Ļ 三爻義を含ま

丽 て 偈 を 説 1 · て言

解 釈

顧

丁

氏

顧

ŋ

典

蒙

<

丁

蘭

刻

0

話

に

あ

る。

0

人

さ 丁 は 生きて れ 蘭 が 空海 氏 11 早 くに 在 之孝感(丁 る 世 如 時 死 < にもよく 反 に 応 別 L れ の孝感を たとい た母 知ら を慕 れた説が . う。 V 原 みて)」 話で 典 母 \mathcal{O} \mathcal{O} あ 容姿を刻 孝子 0 0 たと思う。 傳 拠 は W だ木像・ は 便 逸 『便蒙』 失してい を作り、 指 摘 は \mathcal{O} . る35が、 「蒙 如 そ \mathcal{O} 求上 像 \neg を母 廣 か 弘 5 とし 明 引 木 集 1 て て 日夜孝弟 説 1 法 る^{36°} 苑 珠 養を 林 尽 Ś 蒙 後 求 L 漢 た 時 等 \mathcal{O} 代 で、 に 記 載 像

刻 L 王 檀 經 カン 刻 仏 開 Ļ 像 題 邦之壇 亍 \mathcal{O} に 邦 説 仰 木 話 は 子 は 用 『大唐 例 邦 填 が \mathcal{O} 刻 壇 見 檀 当 西 木 一之誠」」 域 たらず、 K 記 刻 むし لح 巻 意味 記 第 は 述 Ŧī. 対 が して 句 取 憍 $\tilde{\mathcal{O}}$ ŋ 賞 V 前句を受けて、 難 彌 る 國 \mathcal{O} \ \ \ で、 対 0 句 亍 条 \mathcal{O} に 邦 亍 造像に 亍 氏」 は 填 主が 于 関 に す 填_ 対 世 る仏 応 尊を思慕して像を檀 す 0) 典 るの 誤 \mathcal{O} 写で 説 で 話 人 あろうと思わ に 名と考えら 典 拠 が 木に あ ると れ れ 刻 る。 る。 む。 推 定 空 于 三月 さ 海 填 れ は 後 王 \neg 0) 教

弟

子

で

ある事を云

定し、 6 載 # 引 ざさ 尊. が 亍 てい 天宮より 古来よく知ら 主 三 、る380 即 還りその 5 納 得できる解釈 優 れ 闐 た説 像に 國 王 労い 話 テ だと考えら である。 填國 0 言 王 葉 へを掛 $\overline{}$ れ \mathcal{O} 出けた」 る。 刻 檀 \neg 仏 便 と記述されてい 蒙 像 0 は 説 話 亍 を 邦 『廣 . る370 は 弘 眀 于 集 「釋 王 迦方 所 載 に 法上『 音 \mathcal{O} が 類似 唐 廣弘 沙 した故 門 明 釋 集』 玄 則 \mathcal{O} \neg 禪 誤 法 苑 写 林 珠 で 妙 林 あ 記 ろうと 序」 等 に カン 推 記

典 故 は \neg 周 は 易 用 例 繋辭上」 がない が、 لح 「 金 韓 蘭膠漆」の空 非子』「 安 危」 海 に 流 0 あ 略 るが、 語であ 古来多用されてお る。 「 金 蘭」「 膠 漆」 り、 は共に 提示 は 1親密 省略する。 な交情を 表 す 語 句 で あ

 \equiv 論 宗 祖 宗 0) 経 是 典 百 は 真言密教と三論宗は 論 を 作り 同 ľ 龍 共に龍樹 樹 0) 弟子 (龍猛)を祖師としている事を云う。 0) 龍 智が真 言 密 教を 継 い で附 法 第 匹 法 祖となっ 派昆 る。 季」 は 故 龍 に 提 樹 婆と 0 弟 子 龍 智 0 提 は 兄 弟

に 道 述 \mathcal{O} 知 述 る偈には 識 者 i蔽之、 が 深奥で仏事の 三才 三爻含義(述者之を蔽** (天地人) 事歴も多数に上ると記述した事を受け 0) あらゆる義が含ま 三爻義を含まん)」 れていることを推知して欲しいと云う。 は って、 前 0 それら全てをここで 対 句 で勤 操 に . 多方 面 述 \mathcal{O} ベ 徳 行 るこ \mathcal{O} ح 業 が 績 出 が 多 来 Ś な あ が 次 仏

将に 地 日 理 7 を立てて、 陰 者也三爻。 六十四卦 以て性 與 爻 (陽) に 擬してい を構 は 仁と義と曰う。 命 立 能 地 易」 0) 之道、 成す 理 敷者也十 に 0) る。 順たが 用語 日 は ・翼」と用 L 柔與剛。 んとす。 か 三才を兼ねて之を兩つにす。 で陰陽を表す三本の記号の事 L 用 V 例がなく、 立人之道、 っら 是を以て天の道を立てて、 てい . る。 | 周 『周易』にも語句としては記載されていない。 日 [仁與義。 易』「説卦」 故に易 兼三 である。 に 才 陰と陽と曰う。 「昔者聖人之作易也、 は六画にして卦 而兩之。 「三爻」を一単位として、 故易六画 地 を成す)」とある。 $\overline{\mathcal{O}}$ び道を立っ 而 :成卦。 将以順 てて、 空海は 性命之 (昔: 筃 者 柔と剛と日う。 [を連 聖 『御 「三爻」を「三才(天 理。 人の ねて . 請 是以立天之道 来目録』 易を作 「六爻」 るなり、 に「含 人の とし

『便蒙』は次のように注釈している。

虘 翻 立二寸 易 注 奏 旦 易道在」天二、 三爻ニメ足ンナン 矣。 周 易 會 釋 記 \exists 三爻分統 爻〜者 効 也

て た る。 は لح は 釋 国 考 希 時 え 覺 代 難 撰 1 呉 \neg \mathcal{O} 唐 0 人 易 會 \neg $\overline{}$ 釋 易 周 記 易 注 \mathcal{O} 九 + 巻 記 巻 は 述 は 散 カン 散 5 逸 逸 三爻」 L 7 い 確 る。 認 は で 容易 便 き 蒙∟ な 12 11 帰 は 結 釋 \neg で 希 きる 或 覺 志 は \mathcal{O} 五 で 呉書 代 空 呉 海 \mathcal{O} \mathcal{O} 僧 独 侶 自 で 虞 \mathcal{O} あ 翻 用 る。 别 法 傳 で V あ ず ると \mathcal{O} れ 記 \$ 事 空 え か 海 6 が 引 11

偈 七 言二 調 olt な 旬 V 0) 古 体 成 詩 L で て あ 安 る。 置 押 た 韻 木 は 像 上 を、 亚 声 眼 前 真 に L 韻。 て い 平 · る事 仄 は を 想 兀 像 不 L 同 た上 · 二 六 で 0 誦 作 0) 詞 不 で 調 あ が る。 各 兀 力 所 あ る が

9 5 3 1 19 17 15 13 11 空 吾 佛 蕃 松 夜 去 爲 專 裏●論 歳●他 師 陀○薩● 栢 臺 專 浮 滿 善の 飅 寂 鴻 水 相 佛 而 雲○懷 陀○薩●不 貌 飅 寂 鴈●説 鏡 悲 今 常 歳●談 幾 等 是 體 星 空 猿 生○幻 凡 何○何 而 響 霜 影 類 似 滅 色 切 久 此 假 至 10 8 6 4 2 12 20 18 16 14 _ 遠 心 面 顔 青 舉 東 聽 灼 中。乘 容 行 孔 鸞 代●流 者 灼 韞 天 宛 酷 紅 歔 空 妙 風 河 蘂●臆 殊 如 似 花 法 誦●水 欷 愛 志 世 諸 介 返 厭 亦 向 是 許●梁 若 間 趣 公○何 苦 不 誰 陳 ② 歷 ② 辰 ③ 身 ○ 眞 ○ 春 ◎ 津 ○ 神 ○ 倫 ○ 人 ○ し

吾 菩 陀 薩 佛 菩 陀 薩 是 體 れ 何 何 に \mathcal{O} カン 等で色 似 ぞ、 た る、 面め 孔な顔 は 容 宛たは E & 世 間 諸 \mathcal{O} 趣 人 \mathcal{O} たに 倫芸酷 \mathcal{O} 似 如 廿 若ごし

論 師 貌 は 5 凡 て 類 影ら L L 心 行 は 天 殊 L 志 は 神 津 \mathcal{O}

空 裏 懐えが見 \mathcal{O} 浮 雲 滿 は 幾 たび 幻がに か を悲 生 滅 Ļ み、 遠 中 乘 0 臆がに 紅言 ずに 蘂 難って は いん 尒 はで 許

 \mathcal{O}

春

ぞ

を

す

去この 專 歳ぞ爲 專 のに た 鴻言而 る 水 鴈がして 鏡 今三説 は 歳とい 空 しく 12 て 常 至 る て に ŧ 此 假 を な り、 東 談 流 ず \mathcal{O} れ 灼 灼 河 ば た 水 聽 る < 空 返ること 者 花 歔さも 新き亦 何っし 眞 のでき苦 な 5

な

6

W 厭

P う

を

他

臺 栢 飅り寂 うりゅうと L て星 て 猿 霜 響 久 Ļ 切 な 代ょ ŋ を 擧 青さ げ 鸞 って \mathcal{O} 是 妙 \mathcal{O} 法 公 0 誰 塵り に を 向 風 誦 て す 陳の ぶ る

松 夜

解 釈

面 孔 仏 語 顔 \mathcal{O} 孔 即 b 目 鼻 . 耳 П \mathcal{O} 事 で 顔 貌 を 굸

う_。 従 天 諸 0 殊 趣 7 第 天 仏 六 を 語 旬 殊 は に 諸 第 す K Ŧī. る \mathcal{O} 句 衆 を受 生. 仏 教 が け で 煩 7 は 悩 に 天 勤 は ょ 操 何 0 \mathcal{O} 層 7 業 心 に ゃ を \$ 作 行 重 り、 1 な は ŋ そ 凡 存 在 \mathcal{O} لح お す 隔 ると考え ŧ 絶 む き し て 住 てい お む り、 所。 るの 志 ここで は で、 超 は 人 そ 凡 0 \mathcal{O} 如 住 きと す る 讃 般 世 え 界 て を が 指 異 る。 なる事

び 世 泣 界 第 と三 + 苦に 論 句 \mathcal{O} ま + = 空 とわ \mathcal{O} 理 句 れ を は た自 具 水 体 に に写る丸 身 的 に示 カコ 6 脱却 Ļ 1 月 いしたい 第 ŧ 十二 咲 うき乱 と願うと勤 句 で れ る空中 勤 操 が 操 衆 \mathcal{O} \mathcal{O} 生 花 優 に t れた 真 れ 実 布 5 0 教 物 \mathcal{O} 活 理 で 動 を は を述 説 な き、 \ \ \ ベ て 常 第 1 に 九 る 談 句 話 を 第 行 + え 句 ば、 と合 聴 わ せ、 者 は 無 常 む せ 0

領 0 意 を 保 味に 夜 長 5 夜 以 用 いら て地 墳 長 墓 夜 られてい に \mathcal{O} 謂 . 没 事。 するを獲れ 葬 長 る。「長夜」 埋 夜」 ___> 也 __ は ば、 とある。 墓穴 の典 唯だ是 また 拠 はは は れ \neg 埋葬 春 春 秋秋 を 意味 近氏傳』 穸 0 Ĺ 事 とせよ」 襄 長 公十三年」 夜臺 0) が 電 に 墳墓 穸 「 獲 $\overline{\mathcal{O}}$ 保 の 意味となる。 首 杜 1領以 預 注 没於 に 「 電 ^ 厚 地 略 さ 唯是 れ 也、 7 春 穸 秋 夜 窀穸之事 夜 也。 厚 墳 夜

読 み、 公 「公塵 [塵] 公 7、指 \mathcal{O} 塵 _ 倭 曲っ、 勤 操 \mathcal{O} 亦 塵 可 \mathcal{O} ・云へシ 事 であるが、 徳 音サリ 矣。 用 例 塵 ŧ 遺 なく、 塵 也 字 とし 義 ŧ てい 不 明 る。 で 筆 者 文 脈 は カコ 理 5 解 す でき れ がば了 な W 解できるので、 便 蒙 は **『**便 公 \mathcal{O} 塵と 0) لح

飅 飅 は 風 \mathcal{O} 音 を 擬 音 化 L た 語 旬 で あ る

解

釈に

に従う。

青 鸞 瑞 鳥 \mathcal{O} 鳳 凰 0 種 で 青 色 0) 多 W ŧ 0 ここで は、 喜 ば L き 仏 0 教 いえを喩 え 7 い る 空 海 独 自 0 表 現 法

第 章 本 作 品 に 見 る 勤 操 空 海

勤 操 \mathcal{O} 履 歴 事

勤 操 \mathcal{O} 履 歴

述 L 来 小るも カン 勤 検 操 L の 証 \mathcal{O} L 中 で 履 あ に 歴 史 は る。 は、 実 空 を 海 先 $\bar{\mathcal{O}}$ 顕 記 12 後 カン 述 触 に \mathcal{O} \mathcal{O} n 勤 解 た 操 たように 釈 を 0 7) 伝 と考える 誤 記 本 0 等 て、 作 \dot{O} 品 記 間 で 述や勤 違 記 0 述 た記 ž 操 れ に関 たも 載をして する先行研究もこの 0 が Ņ 現 る伝記 存 する 等も ŧ 0 あ \mathcal{O} 空海 る。 最 古 の そ で、 記述を参 0 た 最 め ŧ 詳 が照して記載されて あ 細 6 で 史 ためて、 空 海 \mathcal{O} 記 出

勤 操 \mathcal{O} 出 身 地 が 大 和 高 市 郡 俗 姓 は 父が 秦 氏 母 が 嶋 史 کے 記 述さ れ 7 る。 正 史 \mathcal{O} _ 日 本 後 記 は 逸 失 7 る 0

を

した

載

な

い

た

0

カン

ŧ

L

れ

な

子 6 年 Ш カン ŧ 引 秋 階 確 5 含 用 寺 認 秦 勤 8 度 L が 氏 大 操 7 法 H 部 千 0 滴 師 来 嶋 出 分 宜 則 僧 な を 千 身 記 1/1 は 略 地 述 勤 法 が 之 師 L $\overline{}$ た 則 俗 云云 日 姓 也 千 本 考 勤 々 <u></u> 紀 帰 \mathcal{O} 氏 え 之 略 化 5 文 ىل 系の 章 也 経 れ 記 で 歴 る。 は 載 氏 は 空 春 等 族 そ 海 秋 を たと れ \mathcal{O} 七 綿 Ŧī. 記 に + 密 考 月 れ 四 述 は 戊 え لح 出 聞 b 辰 لح ほ 身 き る400 れ 記 取 地 ぼ 艄 る。 同 載 ŋ 僧 ž 俗 ľ 空 正 姓 で れ 自 傅 海 が あ て 分 燈 は る。 記 い 0 この 大 載 る。 知 法 ž 恐 見 師 5 出 と合 れ 偈 位. 身 て 勤 頌 地 い わ 操 たと思 لح せ \mathcal{O} 日 卒、 俗 作 本 姓 勤 굸 成 後 わ は 操 を 記 Z 記 れ 依 \mathcal{O} 載 履 頼 は \neg さ 歴 É 空 日 れ を 兀 れ 本 海 7 記 た 紀 年 \mathcal{O} 11 述 略 記 秋 な き、 L 沭 た で L が لح は た 依 勅 考 頼 本 於 そ え 作 景 L 宮 た 6 \mathcal{O} 品 雲 中 弟 部 兀 及 れ カン

る

史

ち

5

t

ž

7

い

るとさ に さ は 入 現 る 通 n 勤 夢 て 存 0 7 操 · 天平 を た れ い 0 て な 事 る 見 出 寶 11 は が て 生 字 奷 事 る。 に 実 勤 娠 0 大 年 軽 で 操 L 1 和 あ 寺 た 七 に て、 t ろ 0 لح 紀 五. 現 う 当 \mathcal{O} 11 一八)で 伊 存 が 7 工 初 せ \mathcal{O} 己 子 寺 眀 あ ず、 話 ソ 供 院 星 は が 神 が 現 中 ド 社 懐 勤 を 在 K 大 に 操 大 記 生 辞 入 軽 本 述 ま る話 典 町 L れ 人 ず、 7 \mathcal{O} に は 伞 あ 言 い 勤 凡 る る。 そ カン 操 社 法 σ を 輪 弟 古 為 偉 子 寺 来 に 人に 九 を 達 母 ŧ. 九 \mathcal{O} 聖 は 擬 七 0 賀 伝 人 す 年 て 聞 龍 為 兀 寺 偉 カコ 寺 \mathcal{O} 月 跡 人 に 空 と 空 \mathcal{O} 受 に 海 Ē 海 出 胎 ょ \mathcal{O} れ \mathcal{O} 生 祈 れ サ 創 に 7 願 ば Ì 11 作 0 に F. 1 熱 る 橿 カン ス て、 紃 心 原 精 然 勤 市 に 神 と 同 詣 操 大 で L \mathcal{O} 軽 似 で あ 出 な た 町 \mathcal{O} ろ 生 に \ \ \ 工 結 Š は あ 占。 果 母 入 0 ソ 思 た が 明 滅 う。 年 軽 受 K. 星 寺 賀ゕ胎 か が が b で 龍ヶ祈 伝 懐 逆 あ 寺 願 承

を は は H 七 法 飾 0 カン 本 父 王 が 約 な 紀 秋 す 早 \mathcal{O} V) 位 る \mathcal{O} に 宮 に 施 案 記 中 死 件 あ 策 載 及 が ŋ か で てド 母 講 あ な Ш \mathcal{O} 仏 る 階 手 上 教 7 寺 施 思 確 11 で つで 千 策 る b 認 n \mathcal{O} が 人 育 で、 る ک 出 事 て 任 来 V 6 さ が な う \mathcal{O} れ 記 れ 11 多 た 勅 7 載 数 勤 さ お は \mathcal{O} 操 恐 n れ \mathcal{O} 得 は、 て 年 ら 度 < 渞 い 八 を + 鏡 称 な 月 認 徳 兀 が い め 一歳 出 在 \mathcal{O} 日 る で 世 は l 勅 大 中 称に た 奇 安 勅 妙 \mathcal{O} 徳 ょ 寺 で 七 で 天 0 \mathcal{O} 月 て、 あ あ 皇 信 る。 る に が 得 靈 可 出 崩 に 度 能 さ 次 御 を受 弟 Z 性 れ \mathcal{O} 子 が た 光 れ 入 け لح 仁 る。 高 n 考 天 11 官 を え 皇 千 僧 す 考 5 は 人 \mathcal{O} る \mathcal{O} え れ 小 6 さな る。 得 員 갶 れ 度 لح 年 کے る。 政 な \mathcal{O} 府 11 る。 神 لح そ を う 護 \mathcal{O} き 目 玉 景 為 指 家 \mathcal{O} 雲 弓 正 に 勅 兀 史 削 は 年 財 \mathcal{O} 渞 0 鏡 七 政 7

れ 西 明 な 勤 寺 操 沂 に \mathcal{O} 江 あ 師 に る \mathcal{O} 大 戻 信 蕬 ŋ 靈 Ш は 西 西 僧 眀 明 伝 寺 褝 等 で 寺 に そ \mathcal{O} は \mathcal{O} 由 記 生. 緒 載 涯 が 中 を な 終 興 < え \mathcal{O} た 祖 生. ك 年 推 L 測 7 出 で 記 身 、きる。 述 地 さ れ 姓 Ш など 7 階 V る410 こ 全 て 寺 は 興 不 福 詳 0 寺 で 伝 \mathcal{O} あ 承 別 る。 が 称 事 で ただ、 ・実とす あ 滋 れ 賀 ば 県 信 蒲 生. 霊 は 郡 故 日 野 郷 町 カン 大 字

ىل

とし 槇 て、 指 時 承 L か に 6 尾 が 南 て、 Ш 方 た 7 見 0 説 向 定 て、 都 歳 い 競 を が 7 着 0 で 向 踏 南 違 検 勤 L 南 0 襲 て 上 計 て 11 操 \mathcal{O} 嶽 3 心 す 吉 Ш が い \mathcal{O} n 空 る た。 野 籠 0 槇 窟 を あ て 海 で が 尾 Ш る 行 修 11 が 山 唯 系 る 槇 筆 0 僧 行 寺 \neg 7 は 者 当 尾 で L 集 空 薗 は た い Щ 鈔 る。 た。 田 師 勤 海 を 香 信 操 に は そ 融 靈 南 得 が 金 \bar{O} 師 \mathcal{O} 嶽 峰 度 植 を 時 \mathcal{O} L 度 Щ 尾 代 指 ば لح to 行 寺 Щ Ġ \mathcal{O} 摘 L 表 槇 0 事 趨 さ ば 現 尾 た 比 歟 勢 n \mathcal{O} す لح Ш 蘇 に て 勧 る 寺 \mathcal{O} Щ لح 乗 V ځ E \otimes 伝 寺 記 ŋ る で、 は 出 承 近 述 若 如 思 辺 向 が ¹ < 43, Ĺ 下 を き え 信 VI 勤 Щ 指 じら た な \neg し 操 事 す 便 11 吉 を考 ŧ 蒙 ŧ れ 野 + 挑 ڪ L 7 比 兀 戦 え は カコ 居 お 蘇 歳 L Ļ 住 り、 5 山 7 で 寺 古 L n 具 11 そ る。 以 た 鈔 で 足 たと 事 の 後 れ \Box 戒 ŧ に 泉 座 考 を受け 守 な 付 州 0 禅修行に えら 時 会 槇 Щ VI 聖 と 代 L 尾 れ 7 考 眞 た で Ш 僧 る。 師 え 説 は よる自 也 とし Þ て で 古 坂 11 あ لح 来 南 て 然 る。 \mathcal{O} 田 る。 L 嶽 自 智 光 て Щ 之 立. 窟 岳 全 南 後 VI 0 す 師 都 る 修 獲 る が は 得 か 行 な b \mathcal{O} 賛 \mathcal{O} 南 を が 見 地 都 目 当 伝 同

べ 本 \mathcal{O} 留 唐 が い 學 僧 論 学 上 き 後 な 入 所 紀 僧 法 が 壇 伝 11 等 學 沙 る。 を \mathcal{O} 後 弘 で 道 門 道 法 弘 同 仁 善 慈 慈 道 仁 U 師 八 が 蕬 議 \mathcal{O} 踏 大 兀 月 門 は 入 律 が 安 入 戊 唐 年 留 下 師 滄 唐 之 寺 申 学 留 正 で、 浪 月 壆 一世三 入 \mathcal{O} L 学 問 た 室 + \equiv 入 したことが 唐 兀 事 論 し 論 也 日 が 請 日 \mathcal{O} \mathcal{O} 彼 道 学 明 条 既 益 0 慈 五 匠 統 0) 成 大 大 + لح \mathcal{O} 事 記 を 徳 六 徳 善 記 継 法 実 述 は 歳 0 ž 議 لح 述 師 い 則 入 で さ で、 入 な れ ち \mathcal{O} 律 室 唐 0 れ て 門 故 師 な 勤 學 て 11 下 ğ 入 12 問 そ るに 操 い لح 唐 補 道 る。 れ に 學 な لح 任 過 伝 を 慈 り、 法 誤 さ ぎ 大 境 授 \neg 0 れ 読 徳 野 便 な L 修 沙 蒙 た 之 黄 \ \ \ 学 門 た 初 入 洋 に 道 事 \Diamond L 師 が 室 励 慈 て に 引 カン \mathcal{O} 也 が む 律 起 僧 文章 指 11 L 事 法 師 因 綱 摘さ て、 $\dot{+}$ 師 す \neg \mathcal{O} に で 数 は、 入る る470 は 入 元 善 n 年、 亨 室 入 議 7 唐 釋 450 な が 善 V 空 小 9) 書 學 留 議 る 師 壮 海 問 学 が は 46 に \mathcal{O} \mathcal{O} 0 \mathcal{O} した لح 入 記 善 道 善 唐 記 は 議 論 述 慈 とし 述 議 留 \mathcal{O} が を 大 学 学 \mathcal{O} L 空 善 正 徳 卒 て て L 海 侶 議 0 伝 VI た は は い 入 0) る る。 L 室 記 は 彼 で 奉 7 也 あ 載 以 記 善 大 次 道 る。 L 後 述 徳 第 議 上 慈 さ た 則 に は 善 殆 れ 入 故 声 \neg 名 入

空 5 で 日 が

な わ 所

寺 が に + は 六 道 + 蕬 歳 分 門 \mathcal{O} で \mathcal{O} 時 あ 先 渞 畫 0 蕬 た 達 は 中 入 思 滅 で わ L ŧ n 7 俊 お 秀 り、 \mathcal{O} 慶 + 俊 *** 歳 で い 入門 た が 在 たとし 籍 L 7 \equiv Ŕ 論 学 道 $\dot{\mathcal{O}}$ 慈 伝 か 統 6 が + 保 分に 持 さ 薫 れ 陶 て を 11 受け たと考 た لح え 思 b わ れ n な 統 い が を 受 け 大 安

لح

な 省 仁 天 て 略 長 + 嵯 論 が さ 年 元 議 峨 日 年正 れ 正 を 天 本 空 た 月 行 皇 紀 海 ىل 月 癸 \mathcal{O} 略 考 甲 \mathcal{O} E 命 えて \equiv に 子 記 で 弘 述 恒 + 弘 論 仁 自 お 例 0 仁. + 兀 き 声 体 \mathcal{O} + 日)の 年 が た 最 価 年 Ė 第 い 勝 を 正 月 条に 會 上 月 癸 \neg 級 げ 論 + Ê 日 \mathcal{O} 議 最 る。 兀 本 0) 史 が 月 後 条 科 勝 催 そ 記 に Z で 會 大 \mathcal{O} 'n あ 衆 極 論 が 律 る 僧 議 殿 逸 師 同 於 を 失し に 勤 時 於 天 操 殿 に 皇 V 7 爲 上 勤 に 7 1 小 操 るの 論 評 最 僧 が 価 勝 議 都 造 さ で、 王 東 れ 經 例 لح 寺 也 を 確 記 所 認で 小 講 載 别 と 記 じ、 僧 3 当 きな 都 れ に [載さ に 講 7 任 昇 了 V い 命さ れ 任 \mathcal{O} る 7 す ま 日 0) れ ると た、 更 V み た る に で が、 共 紫 \mathcal{O} 他 あ で、 に に 宸 \neg る 造 殿 確 日 が 東 空 に 証 本 寺 於 と 紀 海 컞 な 略 所 VI \mathcal{O} 年 別 る 記 て、 \mathcal{O} ょ 当 \mathcal{O} 沭 $\overline{}$ う に 座 0 日 な \mathcal{O} 任 通 主 本 史 لح ŋ 命 条 紀 ż で 料 な 略 は 弘 れ 0

海 す き せ 挽 別 入 天 長三 な 記 当 が n 滅 失 に 天 ば、 し 沭 長 年 補 が 小 て L 天 大 た 任 元 僧 お 長 年 僧 為 さ 長 ŋ 都 六 惠 都 カン n 勤 \neg 年 月 が 操 長 to て 日 + 0 惠 知 入 11 月 本 大 六 滅 かが れ る 日 紀 僧 は 日 ま 任 な 略 入 ず に 都 で 大 11 滅 補 造 で 造 僧 \neg し、 東 任 類 あ 西 実 都 寺 ま る。 寺 聚 際 その後任 で、 所 لح 玉 所 に 史 別当 別 記 は 轉 造 当 載 勤 浩 東 などに やされて に に 操 西 寺 として 長 就 が 寺 所 惠 何 V 別当に に t て 11 時 \mathcal{O} 大僧 替 記 11 る。 に 表 たの 載 0 造 現 就 都 て さ 東 た は き、 に 任 で、 れ だ 寺 先 補 命 造 T 所 ここで造西 に 任 さ V そ 西 别 さ れ \mathcal{O} 寺 な 当 兼 れると V 7 後 を 所 造 お が 別 解 を 東 n 継 当 カン 寺 寺 共 \neg 50 11 就 れ 别 所 僧 に、 で 任 そ 當 別 緇 長 就 れ 当 に 造 補 ま 惠 と 任 0 に 任 西 が 記 で 転 l 11 寺 たと そ に て 述 任 天 所 は 長 0 長 L L 別 考 た 後 て 惠 記 当 えら によう 載さ 任 が い 年 に に 勤 る \mathcal{O} 転 な E え \mathcal{O} 操 れ 条 任 る。 0 で、 に な て に す た 代 る VI る そ 本 な 大 0 わ が _ 文 僧 0 カン \mathcal{O} V 日 判 流 て \mathcal{O} \mathcal{O} 都 本 造 文 然 \mathcal{O} で 長 れ 後 脈 間 惠 と に 東 確 紀 合 認 月 カン

Ш 南 天 長 兀 に 葬 年 送 五. さ 月 n 七 火 日 葬 に 西 寺 ふ さ \mathcal{O} れ 北 る。 院 に 於 0) V 日 7 大 勅 僧 が 都 あ ŋ 造 襾 僧 寺 正 所 を 别 贈 当 b に れ 在 る510 任 \mathcal{O} \neg ま 日 ま、 本 紀 七 略 + 歳 で で は 死 去 す 戊 る 辰 八 + 月)、 日 大 東 僧 Ш 都 鳥 部 勤

캪 る。 高 操 日 た、 所 日 秋 本 \neg 七 連 日 紀 絡 本 略 ず 匹 後 ることに は 記 編 記 纂者 は 載 承 さ なっ 和 れ 成立 七 て、 年 死 八 年とも 去 そ 0 兀 0) 日 〇)十二月に上 日 不 が -詳であ を 死 日 亡 異 日 る な とし が り 進 7 小 さ 年 記 なくとも、 れ 齢 録 7 が さ 1 七 れ る + た 应 0 で、 カン 後 لح Ł な 11 条 知 0 帝 ず れ 7 譲 な れ い 位 \ <u>`</u> に る L が 7 ま 〇三六 た ŧ 死 年 勤 去 齢 \mathcal{O} 操 年 は 時 死 去 以 誤 刻 \mathcal{O} 降 写 が さ 生 12 夜 作 れ 半 Þ で 成 た あ さ 可 状 n 能 n 況 7 性 ば が

次 性 n 後 十二 唱 そ \exists 記 記 + が ず 毎 え 記 に 載 \mathcal{O} 沭 夜 勤 事 Z 高 月、 る。 TF. 懺 年 年 操 事 が 史で 日 恒 実 0 た空 れ \mathcal{O} 屈 \mathcal{O} 記 7 \mathcal{O} 海 例 毎 罪 事 年、 佛 条に が は そ 確 載 い 化 障 績 勤 海 請 名 るの され 認 Ž \mathcal{O} 記 を لح 操 0 僧 經 本文が が ī 述 懺 勤 れ 0 續 + 癸 出 が 員 L た 操 悔 事 て て、 日 口 \mathcal{O} 初 卯 E 7 来 \mathcal{O} が L 績 い 本 沙 記 な 史実とし る。 カン 行 空 出 毎 V 後 弥 るの 事 で 請 年 どうか、 \ , 0 そ 海 紀 七 が あ て 選 0 二大僧 は П — 唯、 で、 る。 ば 消 れ あ V 仏 承 たとす る。 て 滅 5 れ 設 名 \neg 和一 都 以 仮に宮 信 会 0 出 史 政 を 長 方 勤 後、 料 頼 事 仕し 願 を二 事 年 惠 操 廣 できると考える を が 要略』 れ 0 十二月二十 \neg は 悔 勘 て 中 なく て、 十 ば、 日 少 既 過 案 V でなくても、 本 に没 僧 於 すると、 たと思わ 、判然とし 52巻廿八 延 年 紀 都 佛 暦二十 間 名經過 略 宮 ĺ 勤 勤 · 中 -日 操 7 行 天長七年 \mathcal{O} い 「年中行事十二月 ħ な 匹 小 大法 を し、 条に るが 宮中 年 る。 *١* ، なくとも 南 読 都 法 (八〇五) 誦する法 師 現 方 - 閏十二 諸 仏 大僧 空海 華 庚 廣 存 名会は 大 八 寅 講 寺 自 都 勤 L 等 月 て 勤 操 或 会で を三 於 で 聖 此 あ **(**) 勤 が 八 V 操 上 清 御 始 日 る は 操 匹 百 初 0 佛名事 あ 始 涼 也 た空 \mathcal{O} 正 勤 が + 口 8 る。 於 殿 条に 史 操 八 7 私 行 لح 類 清 的 参 海 所 歳 過 0 あ 行_ から 涼 で に た が 属 加 ŋ, に 去 戊 . 単 殿 その は \mathcal{O} لح L 大 大安寺 官 た 寅 独で行うよう 始 現 記 宮 通 日 ま 延 中 曹 在 述 限 方 員で 延 暦 本 る 事 L で 廣之 _ 名 . 紀 での が 類 未 て \mathcal{O} 略 + 夜 あ 来 い 嚆 云 僧 法 兀 公 正 \mathcal{O} る。 裏 矢 +的 弘 ハとさ 年 た な 寶 史 仏 \Box 禮 仁十 類 可 勤 法 以 終 亀 \mathcal{O} 仏 於 会 能 行 ħ 五. に 降 名 夜 禁 で 年 千 性 兀 لح は 会 而 て 佛 中 あ は 年 5 が V 七 記 0) は 畢 名 += 高 る 考 名 載 毎 る。 年 七 え 可 年 号 が 末 兀 لح 月 能 以 を な

5

カン

 \mathcal{O}

形

で

仏

名会が

年

末に

挙

行され

1,

たと考えら

る

6 石 に に 兀 渕 同 食 法 寺 日 法 糧 (菙 \mathcal{O} 間 あ 榮 七 を 八 大 八 好 人 供 る 講 安 لح. 講 日 母 L は 共 と 子 古 て 法 榮 座 L に 0 V 来 菙 好 て、 ず 供 葬 た 経 勤 養 る。 が 0 を で 諸 操 \mathcal{O} 八 あ 寺 が 部 順 為 石 延 る。 我 に に、 次 淵 暦 に 広 八 寺 + が 分 そ ま 玉 巻 갶 五. 0 け れ で つ を 朝 堂 年 7 に たと 初 講 八 カン \mathcal{O} 七 ょ \emptyset 座 説 6 仏 れ 九 て 11 七 لح 像 ば 六 行 う。 7 L Þ \mathcal{O} に 0 追 日 前 勤 た 善 0) 12 操 とさ 忌 法 法 母 日 が 要 日 華 に 同 れ な 毎 経 露 座 門 て 欠 に 八 見 ず \mathcal{O} 11 巻 カン 同 L 0 友 る。 さ 寺 て、 兀 が \mathcal{O} ず に 置 日 榮 そ に 来 母 カン 間 好 \mathcal{O} 行 て、 n は \mathcal{O} 由 八 て 悲 0 急 来 た 嘆 順 V 名 死 に \mathcal{O} 次 た し が を、 0 を 法 0 順 7 亡 11 日 華 で そ 次 て現 < 法 $\overline{\mathcal{O}}$ 講 経 な 友 説 八 何 存 講 巻 る。 カン 0 L す ず 母 7 0 る 因 そ 故 い 0 に 最 う。 講 縁 隠 人 \mathcal{O} 古 上 亡 0 説 0 そ 思 骸 7 追 L 史 た。 れ を 友 善 11 料 供 が 石 は 同 世 更 同 淵 養 に 法 寺 じ 0 知 毎 七 ょ \mathcal{O} 為 寶 年 う 5 人 Ш に لح れ 命 \mathcal{O} 行 日 語 麓 母 う

拠 榮 仮 に 操 +任 ば 好 に 勤 が 世 法 後 勤 母 は t 操 法 紀 菙 操 て、 子 + が 菙 八 後 が 恐 \mathcal{O} 歳 石 八 半 講 空 追 淵 ら 諸 \mathcal{O} 講 に لح 海 死 処 善 寺 \mathcal{O} \mathcal{O} は \mathcal{O} で 供 去 京 で 創 世 記 獐 養 ま 始 般 評 都 始 述 師 \mathcal{O} で 8 者 に が に \mathcal{O} 法 在 4 た で 流 定 通 な 華 着 住 L カン あ 布 り ゛どう 法 八 \equiv L 5 0 1 L して、 要 ず 講 た て 7 百 を を カン 可 い 11 口 又、 たに 法 施 講 た は 能 t Ü لح 行 華 定 性 法 思 八 て L 石 カン が 違 華 講 た 渕 わ V で 高 V 八 \mathcal{O} に 寺 た な れ 講 な 11 法 違 لح لح る。 \mathcal{O} 11 \langle を 要 い 4 す 思 行 <u>"</u> に な 上 لح れ 伝 わ 0 は 従 1 ば t れ 不 た 寶 ح 事 考 カン る。 詳 繪 え そ す L 年 < \mathcal{O} 詞 6 て \mathcal{O} 間 唯 榮 れ 後、 ず、 11 約 発 好 ば \mathcal{O} た +端 空 لح 説 \mathcal{O} 弘 多 が \mathcal{O} 口 海 当 話 で 数 仁 は 説 延 時 に あ + \mathcal{O} 兀 暦 石 話 で 記 ろ 年 故 + + 淵 が 載 ŧ 正 人 日 五 寺 史 特 Z 月 \mathcal{O} 間 年 実 に 異 n لح 追 に に 言 か た \mathcal{O} どう 小 善 渡 す 及 事 僧 供 ŋ n L لح 績 都 養 従 ば て か は に 事 \mathcal{O} に い 確 な 昇 依 勤 L な 認 既 る たこ 任 頼 操 で 11 に し、 を \mathcal{O} \mathcal{O} き 考 لح 受 三 る で、 \mathcal{O} え に け +造 史 6 伝 て、 東 な 九 料 承 れ る 寺 歳 \mathcal{O} は は 説 大 に な 所 少 勤 安 当 別 話 な 11 操 寺 \mathcal{O} 当 た \mathcal{O} が لح 事 を に n 通 と い 本 は n 勤 to え

で لح を 関 さ 勤 係 れ 操 が が て は 最 後 創 VI 建 る^{54°} 世 ŧ 深 た い 石 大 لح 寺 淵 安 で 0 僧 寺 伝 あ 正 か 承 0 b を た 呼 東 否 6 称 [定さ L さ 1 れ (れ る 兀 て 又 が km 11 に る 同 石 位 淵 師 置 は 寺 Ļ 寺 は れ 跡 現 堀 6 在 カン 洲 0 6 存 春 事 出 在 峰 カン 土 せ 師 5 ず、 L が た 指 石 そ 鐙 淵 摘 \mathcal{O} 瓦 寺 さ 寺 が لح n 大 奈 跡 7 良 に 安 い 寺 時 0 る 代 11 \mathcal{O} 如 < 密 前 7 期 は 接 0 な 石 ŧ 淵 奈 関 良 0 寺 係 で は 市 が あ 大 東 認 る 安 南 8 寺 6 事 0 カン \mathcal{O} 高 れ 墓 て 円 Ŕ 所 Ш 的 石 \mathcal{O} 大 淵 な 西 安 麓

た

ŧ

 \mathcal{O}

ىل

考

え

6

れ

石 淵 か 寺 6 至 \mathcal{O} 役 沂 割 \mathcal{O} 場 カン 5 所 故 12 あ \bigvee 0 る 石 追 善 淵 供 寺 12 養 勤 法 操 華 が わ 八 ざわ 講 が ざ 類 推 居 さ 住 れ す る 榮 理 好 由 が 母 子 な \mathcal{O} い と 説 話 考 \mathcal{O} え 6 誕 生 れ る。 カコ ら 後 世、 勤 操 に 大 安 石 渕 寺 僧 僧 正 \mathcal{O} 墓 \mathcal{O} 呼 所 称 で を あ 付 0 た

仁に ま 語 配 お で 施 布 り、 は す。 師 ま で 勤 れ 詞 た す 既 操 亭 吼 恭 る 炭 或 \mathcal{O} \mathcal{O} ·す)。」 敬 など تلح Þ 或 活 は 社 雅 供 動 を 調 0 老 会 音 を入れ 倭 養 指 を ょ 福 僧 は とあ 行っ らうな 曲 揮 に 祉 聽 の IJ 以 衣 活 事 者 るように、 た。 , て 足] ŧ を 動 を で 沐 K 設とに \mathcal{O} 絶 あろう。 元を 浴 カン 0 腸 設 L て仏仏 義 不 ١J 老 て、 せ 成 温 明 て、 L 僧 礼 日 で め 先 め 衣 本 或 る器 あ 賛 輩 心 或 や中国 奏漢 0 0 \mathcal{O} 泇 . О に 勸 たら 社 具として 意 陵 年 敬 造 樂 会的 老 味 供 0 煖 0 而 L が いす)。」 哀 子、 V 音 活 \ \ \ た僧 響 読 動を行 平を演 詞 1 には 4 諸 享 語 る。 侶たち 見 取 لح 寺 能 旬 者 n 記 普 奏し 仁 そ カン ったのであろう。 を な 述 施 5 (或 \mathcal{O} 愛 に 11 L て仏 類 暖 死 は 衣 て 或 推 房 せし 老 倭 服 W 設 前に捧げ して 器具 僧 曲 を る。 老 む。 供 に を '暖房! 僧 ハは恐ら 調 衣 し、 衣、 煖 を べ たとは、 器具 学上 لح 心 施 以 Ź を込 す 記 て、 、 と 思 心 は 木 事 述 敬 製 義 \Diamond か L 供 わ で、 便 師 て て 成 れ 蒙 (或 11 吼 に 敬 次 る。 沐 人 雅 は る 11 \mathcal{O} ŧ 造 供 句 Þ \mathcal{O} 音 浴 \neg 不 聽 す。 に 養 便 煖だ で、 \mathcal{O} タル よ 勧 蒙 詳 者 に 進 絶 努 敬 を 勤 或 \otimes は L 勸 操 腸 は 供 は 漢 た て 火 て 8 とし 音 迦 樂 は 作 桶 お て、 空 5 ŋ 陵 を 楽 0 奏 的 哀 て 海 せ 類 諸 才 響 L お 流 لح 江 寺 見 案 戸 諸 能 て、 \mathcal{O} <u>う</u>。 者 省 じ 寺 時 に 愛 能 略 7 代 恵

一 勤操の伝承

二── 勤操を空海の師とする伝承

た 事。 古 来、 他 \mathcal{O} 勤 操 0 を 空 は 泉 海 州 \mathcal{O} 槇 師 尾 لح Ш す る伝 寺 で 空 承 海 は に 概 得 ね 度 を 件 L \mathcal{O} た 事 事 柄 で に あ 集 る。 約 さ れ 0 は 空 海 若 年 0 時 虚 空 藏 求 聞 持 法 伝 授

れ 同 様 \mathcal{O} 日 伝 勤 操 で 承 0 は \mathcal{O} ほ 最 ぼ 大 周 偽 \mathcal{O} 忌 作 根 法 で 要 拠 あ は 0 ろうと 時 遺 に 告 勤 さ 類」 操 れ 0 56 に 弟子 て 1 負うて る570 たち が 又、 11 梵 る 網 本作 が、 經 を 明 品 講 治 じ 同 以 て 降 時 供 に \mathcal{O} 養 先学 制 す 作 っ る た 達 さ n に め た ょ に 1) 表 爲 白 先師 空 海 \mathcal{O} 制 講 \mathcal{O} 作 真 釋 撰 を 梵 空 網 で 海 經 は に な 表 依 白 い 頼 は 疑 た 本 義 作 が ŧ \mathcal{O} 品 出 で さ

23

勤 延 あ 暦 操 る。 緘 第 が 石 空 題 抄 十 海 辞 に 年 \mathcal{O} \mathcal{O} 次 湍 師 先 \mathcal{O} 廿 で ょ あ 勤 師 る う 操 لح に 爲 は さ 記 師 勤 述 れ 操 さ て 0 とし きた れ 事 て で して、 い \mathcal{O} あ る。 で る 表 あ が 白 る。 文 中 \neg 0 聞 \mathcal{O} 表 書 白 我 を で 空 は、 \mathcal{O} 海 注 自 釈 先 身 に 師 が 奉 石 我 読 渕 L 大 た 勤 師 ىل 操 勘 御 僧 違 自 正 稱 也 い 也 L とし て、 とし て、 解 釈 7 割 さ 11 る。 注 n に 7 き ほ た 略 ぼ 同 た 記 年 8 굸 代 出 家

師 先 師 石 渕 者 贈 石 僧 渕 TF. 勤 召 操 率 僧 正 發 也 向 始 和 泉 法 或 相 槇 宗 尾 後三八 Ш 寺 道 於 慈 律 此 師 剃 除 弟 髻 子 髪、 善 議 授 大 (徳゠付 _ 沙 弥 $\ddot{+}$ 戒 学 七 + 論 威 是 儀 大 名 師 稱 剃 髪 教 師 海 也 御 潰 告 云 爱 大

た 弟 ح. 子 恵 遺 空 表 わ 告 海 白 れ 類 る590 とさ は は 空 \neg 徐 聞 れ 海 Þ 書 自 て に 身 い 増 る。 が 広 緘 奉 さ 石 読 以 れ 抄 降、 L Ĺ 7 た 0 き لح 制 た \mathcal{O} 解 作 解 釈 考 時 釈 さ え に は れ は 5 たと考え 踏 れ 襲 遺 る 立され 告 が 類」 てき 6 そ れ は 0 既に た る。 中 0 存 従 当 つ 在 初 て、 l \mathcal{O} て ŧ い 0 表 たた 白 は 少 め なく に に、 記 とも 述 そ さ 0 +れ 世 た 潰 紀 告 法 中 類 化 頃 某 に に 引 \mathbb{Z} は き 成 ず 0 立 6 解 L れ て

考 が に 元 え 且 11 勤 たと 5 寺 操 と記 れ 願 0 考 る 曉 弟 لح 述さ えら を が 子 述べ 勤 達 れ ħ は 操 空 b 海 \mathcal{O} る そ れ 弟 が 弟 は て \mathcal{O} 子 誰 子 W 勤 が لح 僧 名 る。 操 する 等、 代 \mathcal{O} 0) 表 あ ここで 木 して 説 る弟 顧 造 ŧ 丁 \mathcal{O} 氏之孝 表 出 子 \mathcal{O} 像 白 た が 記 に を が 出 沭 ^马感、 什 奉 な \mathcal{O} す 境 読 か ように、 讃 刻于 野 L 0 に て 黄 た つ 邦 洋 ŧ \mathcal{O} W 之壇 意 師 カン 師 て が が 0 木。 否 通 僧 木 欲 定さ る 名 像 懸 よう (弟 P を制 日 れ 人数 月、 子 É て Ď 作 11 など全 憑 Ļ 僧 る600 法 詞 等、 化 余 某乙」 一く不明 恐らく 周 丁 翰 .忌法要 氏 日 \mathcal{O} لح 月 筆頭弟 で 孝 記 女を行う に あ 感 · 懸け 述 る を L 顧 子 たの W 後 ŋ が た と め 世 4 で 欲 表 に て、 あ L 白」 聖 は、 ろう。 て、 干 寶 を 0) 相 邦 詞をか \equiv 奉 当 論 数 壇 読 を 余 0 \mathcal{O} 木 l た 師 弟 \mathcal{O} に \mathcal{O} 翰会刻

記 記 で 載 載 あ さ で る。 告 n あ 類 7 0 内 11 7 لح る 史 は 実 著 別 لح 名な に、 は 言 高 Ž 勤 僧 操 な が を い 僧 空 ŧ 坊 海 \mathcal{O} に 0 で 居 師 あ 住 とす る。 L 7 んる現 以 下 たとの 存 \mathcal{O} す よう んる史 記 に 録 料で 記 で 述 あ 最 L る ŧ 7 が 古 い 11 る 年 ŧ が 代 0 \mathcal{O} は 法 異 華 なる人が 應 八 和一 講 \mathcal{O} 年 伝 混 九 承 在 六二 に L 関 て わ お \mathcal{O} る ŋ 榮 大 当 好 安 時 に 寺 0 0 住 11 伝 侶 T 承 記

次 間 勤 操 僧 正 弘 法 大 師 御 師 匠 也 次 間 行 表 和 尚 是 傳 教 大 師 御 師 匠 也 北 室 拾 餘 間 内 東 端 間 榮 好 禪 師

是居 入 定 之 老 時 **日**: 於 附 寺 邊 云 吾 後 僧 世 食之自 第子 ·以二大 分 -、 安 專孝 寺 養之人 爲二本 寺 也 可 西 室 仕 拾 餘 釋 間 迦 内。 大 師 北 端 之文在別 云御遺告 間 弘 法 大 師 被 當 寺 臨

れ に る620 0 遺 記 一大安 告 述 は が 寺 明 漏 6 住 れ カン 侶 7 記 に 流 布 御 \mathcal{O} 遺 L 作 告二十 てい 者 は た 不 \mathcal{O} 明 五 か、 条 で あ 世 0) る 間 が、 吾 では 後 真 勤操 (言宗 生 弟 を \mathcal{O} 子 空 最 門 海 徒 高 0) 等 幹 師とする伝 以 部 大安 が 記 述 寺 可 L 承が たと 爲 本 定着 は 寺 考 縁 してい え 起 難 第 八 い たと考 を \mathcal{O} 参 えら 事 照 カン L れ 5 7 い る لح 0 恵 頃 既 わ

来 た 空 0 海 であ 自 身 る が が、 虚 空 藏 御 求 遺告二十 聞 持 法 を 五 条 沙 門 では、 から 伝 具体的 授さ れ に たと記 次の ように記述し 述して 1 る 0) てい で、 る 古 来 沙 門 を勤 操とみなす 伝 承 が 出

入学 が 記 + 明 沭 五. 6 後 L 歳で入京 然シテ後チ E た事と異 カン で あ 沙 及 る。 門 し な て間もなく勤操と逢 カン _ ァ 子 6 0 生 虚 てい 年 空藏 -十五 - 入 る。 求 聞 京シ、 持 一教指 法 \mathcal{O} 1 歸 初テ 伝 虚空藏求 · 逢 授 で を受けたとし は 石 志学 渕 聞 持法の伝 贈 + 僧 五. 正 |歳)では てい 大師 授を受けたとし る。 受力太虚空 冏 刀大足に 0 事だけ 一藏 . つ てい 等 で 幷 1 ŧ, . る。 て 能 漢籍を学 \neg 満 御 0 虚 遺 告二十 空 記 び、 藏 述 は 法 + 空 五. 呂 条 八 海 歳 が で入 が 偽 作 京 教 心 で L 指 大学に あ 歸 念 る で

 \mathcal{O} る 勤 解 7 操 前 0 釈 本 討 に \mathcal{O} 作 L する 弟 て 品 弟 子 子 V \mathcal{O} 達 た 海 る 偈 to は に 向 とっ きも 親 に 愛 \mathcal{O} 彫 7 あ 第 像 \mathcal{O} る63が \mathcal{O} 0 意 五 味 吾 態 旬 ŧ 師 様 込め で 吾 などを聞 偈 あ 師 り、 7 相 は 貌 空 弟 き 吾 等 取 海 子 師 凡 0 達 ŋ 類 لح 師 が 吾 で 作 そ 表 師 現 は 0 Ō \mathcal{O} た な 容 L 勤 相 たの .貌 \ <u>`</u> 貌 操 など は ま \mathcal{O} か ょた、 た、 凡 木 0 t 類 像 描写 知 に \mathcal{O} れ 吾 等な を詩 開 な 眼 V) は 供 相 に 養 読 空 手 \mathcal{O} \mathcal{O} み 海 に 為に 込 に親愛を は 吾 んで この 師 作 詞 表す為 1 لح さ 偈 る。 あ れ る たも を に 事 次 作 項 用 を 0) 空 で る 11 であ た 勤 6 海 れる 8 操 自 かに、 る。 0 身 語 木 0 像 開 句 吾 言 に 眼 で 師 لح ŧ 供 0 L 養 あ は 7

二一口 勤操の木像について

弟 子 僧 顧 丁 氏 之 孝 感、 刻 于 邦 之 壇 木 لح あ るよう 弟 子 ち が 寄 進 て、 勤 操 0 周 忌 間 せ る

造 が 仏 ₩. 5 る 早 に L た < \mathcal{O} 依 木 で 頼 像 あ は る 7 大 が L 作 安 現 0 寺 潰 在 た カン 骨 は 木 石 は 残 像 渕 弟 0 で 寺 子 7 あ カン た る。 い ど ち な ち \mathcal{O} VI 恐 6 手 6 か で、 勤 に 操 安 大 は 現 置 安 存 さ 寺 以 す n 僧 + る た \mathcal{O} H 繿 可 墓 茶 真 能 地 毘 像 性 で 東 が 空 あ Щ 高 鳥 る 海 11 南 部 像 都 南 等 石 麓 \mathcal{O} 渕 ょ 寺 上 う E 亚 に 安 坐 運 ば 京 像 で \mathcal{O} れ あ 鳥 埋 部 0 た 葬 Щ z لح 南 麓 思 れ た に わ 於 ħ 考 い る え 7 が 6 火 葬 残 れ 念 な

普 画 品 n 菛 لح ば 像 堀 さ 院 は 加 洲 玄 途 れ 蔵 元 春 朝 に て 且 峰 \mathcal{O} 在 鎌 い 玉 寺 る。 世 醌 倉 宝 \mathcal{O} 0 時 絵 醐 永 代 仏 L 勤 寺 延 初 操 師 カン 蔵 年 期 僧 衣 勤 L 間 + 朝 操 都 ⁶⁴が 堀 九 像 僧 世 池 八 都 写 紀 が 七 師 画 生 末 \mathcal{O} あ 5 像 Ļ 頃 る。 見 八 に 九) に 解 0 そ 作 V に れ 頃 成 て ょ \mathcal{O} を に さ れ 画 原 は n に ば 像 义 此 た \mathcal{O} ょ に 0 لح 醍 上 れ L 木 さ ば、 醐 部 て 像 n 寺 に 無 が T 画 本 名 実 11 像 作 0) \mathcal{O} 在 る 品 木 絵 L \mathcal{O} \mathcal{O} 像 師 て を写 比 全 が V 文 較 平 たこと が で、 生 安 讃 L 時 普 لح た 代 に 門 L 画 末 な て 院 像 頃 る。 揮 画 が に 像 毫 醍 他 模 さ は に 醐 写 木 れ 勤 寺 L 像 て 操 に た 11 を \mathcal{O} 伝 \$ 写 る。 存 画 \mathcal{O} 生 像 さ 5 L + れ L た L て 11 世 ŧ 7 い る。 著 事 \mathcal{O} 紀 頃 名 実 で لح は \mathcal{O} な 0 な 作

い 尾 لح 年 に n 百 で る。 に 付 る。 本 to す 作 0 本作 なろ 乃 < 讃 ŧ 品 七 لح 爲 依 で لح 九 う。 もと あ 銘 頼 品 る。 爲 さ に \Box \mathcal{O} 題 題 先 編 れ 爲 辞 と て 彫 辞 師 纂 先 が 作 講 L 像 は 師 あ て、 成 \mathcal{O} た 釋 講 0 故 梵 開 L Ł 釋 た 銘 贈 網 た 眼 \mathcal{O} 梵 か を 供 僧 で 經 網 どう 記 沙 養 正 あ 表 經 門 勤 白 述 \mathcal{O} る。 表 カン 操 L 勝 為 白 大 は 疑 に 7 道 口 間 徳 歴 作 載 \neg 11 4 で 影 性 Z る Ш 成 空 あ 讚 靈 瑩 L n 海 并序」 集 る 玄 た 本 た が 文と が 補 作 珠 作 t 闕 品 碑 品 とも 仮 で 偈 抄 で \mathcal{O} に あ で 上 は 題 Ŀ 正 る に を 文 は 辞 題 しく が、 収 頭 は 辞 載 \mathcal{O} 文 影 蒐 を付 É 題 本 頭 讃 作 収 辞 文 れ 者 に 幷 L L 0) を て た 序 名 た 内 付 い 沙 が لح カン 容 る。 け き 門 لح な どう るとす に 漏 は に V 合 空 照 が 伝 補 カン 致 金 海 聞 は 闕 L れ 文 剛 は 筡 疑 抄 ば な 尾 文 名 ŧ 間 11 幷 付 に 参 は で 奉 題 は け 書 照 周 あ 造 辞 な L 知 る 故 で 而 上 い 7 \mathcal{O} 勤 あ 説 作 لح 濟 ょ 操 る。 思 偈 者 暹 5 大 É 言 名 わ が 徳 を れ 影 付 濟 像 記 る 讃 L 濯 文 記 述 た が 幷 述 لح 本 は し 承 偈 思 作 画 暦 7 文 品 像 わ

濟 に 暹 は 先 亡 が 失 間 述 L べ 違 0 て た 7 11 如 今 た く \mathcal{O} 可 題 能 木 辞 性 像 が を は 付 高 少 な し 11 た 上 思 غ 推 わ ŧ 測 n 永 で る。 延 き 年 る 替 間 頃 n に に 普 は 菛 実 在 院 画 L 像 た 6 カゝ 或 L 11 が は 同 様 約 百 \mathcal{O} 画 年 讃 後 に を 付 濟 暹 た が 画 \neg 像 補 闕 が 存 抄 在 L を た 編 8 す る

が 11 は 本 を \mathcal{O} 周 を る 本 作 障 勤 忌 本 法 作 り 法 子 品 操 作 要 に 珠 相 品 は \mathcal{O} 品 に 仕 に 六 を تلح 生 は 残 \mathcal{O} は 立. 対 祖 涯 ように て、 さ す 欲 師 を 弟 な 時 る 像 縣 長 子 け 間 勤 讃 \mathcal{O} 日 < たち 月 描 ħ に 操 文 扱 伝 を ば 追 \mathcal{O} 写 0 え が 彫 揮 に な たの た 憑 わ . 持 6 詞 れ 像 毫 11 参 善 7 0 L な で لح 余 L た障 珠 あ 翰 後 11 願 た る空 僧 3 ろ 1 日 紙 Ś に 正 子 堀 月 に 後 池 海 カン 空 立 を に 両 障 は 師 て 彫 海 懸 作 子 参 が 同 た 像 け 品 じく、 加 カン 有 指 文と \mathcal{O} を揮 W 弘 L ŧ 後 摘 لح らろに 法 さ 書 な L 欲 毫 ħ カュ 大 れ 木 を したと思わ 師 0 <u>\</u> て 像 依 な て、 たと V 御 \ <u>`</u> て \mathcal{O} 頼 筆 る 前 カン L 詞と が、 思 い け で てできた と を わ 7 ず 奉 れ 七 記 余 れ . 読 れ 1 る。 述さ る たら 0 に 大寺 翰で たとも 作 L 表 れ に 7 L 品 巡 白」 て 憑たの ţ \ \ \ で 禮 い む 考 は あ る₆₇。 私 え 京 善 弟 る。 _ 記 6 لح 都 珠 子 記述 像 でい、 れ そ カン 空 た 海 6 と る 5 れ 同 が が 離 で、 0 L じ 7 れ 真 興 奉 く 筆 福 後 読 空 7 い 世 W カン 寺 L 海 る どう る 本 に た 如 は 南 作 南 長 本 < 考 < 都 品 カン 円 作 え を は 堂 品 弟 で 伝 揮 疑 え 6 に لح 子 \mathcal{O} 勤 毫 問 安 る n た 置 で た 表 5 操 L る た あ \Diamond \mathcal{O} し が 白 が る 師

空海と勤操の関係

三

安 \mathcal{O} 住 実 が 親 空 相 寺 付 た な 伝 海 宗 L L Š 会し 時 に 史 た で 承 は 筆 あ \mathcal{O} 入 料 が 頭 交 思 ŋ 7 残 る。 が 弟 際 貧 僧 泰 さ 存 子 を わ 道 基 綱 続 泰 在 れ \mathcal{O} n 與 補 基 を 實 る。 れ せ 7 け 公 大安寺 任 に ず、 V 慧 て 藺 5 る。 師 لح \mathcal{O} 空 11 膠 で 智泉 たこと 史 事 海 春 先 $\tilde{\mathcal{O}}$ は L 料 僧 \mathcal{O} が 秋 本寺 で、 たと にしたとも考えら カン 勤 が 高 E ら考え 操 大 雄 が 久 事 を こされ を空 安 Щ 判 (貧 東 実 寺 寺 る。 で 大 道 てい て、 海 0 に 寺 あ لح 所 落 空 \mathcal{O} として n 公 るѹが、 万属とさ 発 師 5 海 ば لح 表 とす 着 が 空 は 者 帰 れ V 海 V 蘭ルこう は た る。 る れ 朝 る。 泰 さし、 實 てい とき、 基 + なること 慧 \neg 遺 従 加 \mathcal{O} 安 0 が 告 る。 入 生 歳 祥 大安 京を て 空 一没 類」 \mathcal{O} 寺 中 海 年 時 春 伽 一寺に 等 許さ で \mathcal{O} 等 カン 秋 藍 同 ŧ 0 に 履 5 己に 入寺 縁 付 智 れ 時 族 歴 勤 起 会して を て、 点 泉 は 操 久 資 で L 全て不 は 中 たと交 財 た 大同 は 九 心 帳 後に とし 歳 弟 カン 流 どう 子 70で . 詳 に 兀 لح が て当 作 年 等 記 で あ L て 八 か 5 を は あ 述 0 れた は 泰 る。 た事 空 初 通 \circ L Ü 海 疑 基 0 て 九 弟 と考 て 間 は 實 \mathcal{O} い に 七 だ 斡 子 \mathcal{O} る。 東 恵 な 勤 لح が え 旋 大 達 月 る。 操 考 寺 6 で が 下 カン 承 勤 لح え 僧 和 n 馳 旬 な L 空 7 操 に る。 カン せ に n 海 11 な 年 0 参 は L \mathcal{O} ľ 室 る。 高 0 0 に 年 律 接 7 慧 \mathcal{O} に た 雄 月 師 \mathcal{O} 点 後 は 伝 入 11 Ш 当 は 7 に 承 0 で 寺 非 勤 た あ な 補 初 は

操

任

大 確

とる移に

な

かったと思われる。

含

ま

n

る。

操 兀 最 大 が 年 そ 限 含 \mathcal{O} \mathcal{O} 広 ま + 後 げ n た 7 月 勤 V に 操 L た は た 中 か 弘 は 壽 仁. 圳 感 兀 僧 然 年 興 لح 詩 綱 幷 律 L 入 n な 詩 師 L 11 た を 補 僧 空 作 任 侶 海 さ り が れ تلح 南 知 る \mathcal{O} 友 が 都 絎 に 六 宗 井 密 入 \mathcal{O} ま 教 京 主 で \mathcal{O} は だ 新 せ ず、 中 た 0 た 壽 な 学 感 座 大 侶 興 禅 安 に 詩 法 寺 贈 幷 上 0 共 詩 Ŀ た に ま 可 を 贈 能 贈 0 0 性 た 7 0 が た \mathcal{O} V で た あ \mathcal{O} か あ لح 考 る 勤 推 が え 操 量 5 す れ 半 る \mathcal{O} る。 然 他 時 そ は 空 \mathcal{O} \mathcal{O} な 知 海 友 は 11 員 が に 弘

仏 武 僧 た 流 L に L \mathcal{O} 高 7 対 法 7 頂 帝 لح b 雄 ħ 次 \equiv 12 す 式 法 あ な 金 \mathcal{O} 行 い \mathcal{O} 門 る で る 昧 中 0 る \mathcal{O} 勅 V 剛 た三 者 勉 \mathcal{O} 行 灌 \mathcal{O} 耶 道 弘 命 に、 学 場 仁 な 頂 で で、 戒 従 口 延 七 空 授 \mathcal{O} わ を を 0 に 受け 暦 授 て、 於 学 \mathcal{O} 機 何 秊 海 n 灌 故 た。 て、 が 僧 運 論 け 孟 て + 灌 再 頂 が が 秋 ح \equiv 中 高 72が 萌 度 公 兀 法 兩 頂 空 験 を 昧 雟 年 部 率 雄 \mathcal{O} 相 仏 を 耶 感 始 海 時 等 灌 行 諸 Щ 八 教 興 寺 \mathcal{O} 公 南 頂 0 戒 \otimes カュ 名 界 \bigcirc 布 た た 6 灌 に を 僧 詩 に 都 五 \mathcal{O} 授 雲 時 さ 経 私 頂 六 沐 注 れ 緯 け に 的 لح 宗 於 を 集 九 す 目 B 7 草 な 同 L 月 \mathcal{O} 高 を た 空 兩 V 名 لح 参 灌 ľ 雄 L 浴 る710 部 た 海 だ は 加 頂 伝 日 金 び た \Diamond 灌 を L 南 が 法 に 剛 た 最 受 る 今 た 頂 都 に 灌 同 道 高 \mathcal{O} に け 僧 諸 新 日 場 六 頂 ľ 雄 は 沐 宗 弘 \mathcal{O} た で 高 侶 で K Ш 間 す)」 仁二 \mathcal{O} \mathcal{O} 密 あ 雄 で は \mathcal{O} 授 寺 違 名 気 教 か、 る Щ 真 伝 \equiv で V 年 Ĺ 僧 を 寺 法 昧 鋭 言 لح \mathcal{O} が が 持 そ 考 密 灌 \mathcal{O} 十 灌 で 耶 記 な 誰 僧 5 \mathcal{O} え 教 頂 戒 頂 最 述 V で 月 帰 理 6 に を 侶 澄 は L あ り、 行 達 に 由 れ 浩 沐 空 最 カン て る。 0 は が 詣 う 海 澄 6 兩 い た 空 綱 最 判 事 灌 \mathcal{O} 将 が 部 る 0) 海 を 来 澄 然 既 深 で、 灌 越 頂 が カコ لح 置 が に を 頂 に 州 11 \mathcal{O} 全 ょ き 真 空 L 勤 龍 受 人 团 弘 < る 海 操 け 達 闍 言 な 且 \mathcal{O} 仁 ネ 梨 寺 \mathcal{O} 達 寺 灌 密 11 で 灌 七 明 \mathcal{O} 密 が 更 あ に 頂 教 で 頂 秊 で だ 経 に 教 最 順 な を \mathcal{O} 0 を 孟 あ 受 営 が た る 方 \mathcal{O} 澄 曉 重 検 秋 け に لح 事 価 カン が カン ね 証 当 考 を た 値 6 6 T 正 最 す 諸 た な 澄 同 伝 平 え 意 べ 統 K لح 6 で 認 帰 ľ 授 安 6 味 き \mathcal{O} 史 思 L 価 \emptyset 朝 伝 さ 京 れ す 名 て 後 法 料 0 値 n \mathcal{O} る る 僧 空 た に 灌 西 い が た が を か 高 海 真 頂 真 勤 る 郊 諸 全 率 言 言 外 に を 操 ŧ 11 K 1 受 要 L そ 密 密 で は \mathcal{O} 見 て さ 請 教 戒 \mathcal{O} 教 桓 五. 名

弘 七 年 は 空 海 0 7 高 野 Щ 0 下 賜 を 受 け 修 褝 0 地 を 得 7 真 言 密 教 \mathcal{O} 弘 通 本 格 的 乗 V) 出 た 時 で あ る 最

に 澄 正 が 勤 統 \mathcal{O} 操 伝 な 法 تلح に 灌 頂 行 を な 実 0 施 た す 灌 ること 頂 を 存 を 知 呼 L び 7 カン い け た た 空 \mathcal{O} 海 カン が ŧ 勤 知 操 n 等 な \mathcal{O} 11 南 都 六 宗 \mathcal{O} 真 言 密 教 12 造 詣 が 深 興 味 を 懐 11 る 人

達

次 لح あ 記 沭 は \mathcal{O} で る 事 さ 交 は が 空 流 n 正 海 て が 空 L لح 11 始 海 蕞 る 11 ま ٢ لح 勤 が 0 澄 す لح た 操 石 لح ħ \mathcal{O} \mathcal{O} ば Ш 經 は 最 大 考 典 初 徳 え 等 \mathcal{O} \mathcal{O} 0 は 難 接 時 勤 貸 11 点 点 借 操 は で と 空 が 何 は 解 盛 海 時 少 釈 真 W で な さ 筆 で あ くと n \mathcal{O} あ 0 て 最 た 0 た、 1 t 澄 カン る730 宛 勤 弘 7 操 \mathcal{O} 仁 n と 書 ま \mathcal{O} \mathcal{O} 簡 年 で 書 交流 カン 0) 簡 忽 5 検 は が 兀 恵 討 九 あ 年 帖 で、 月 0 頃 五 た に ま 大 日 事 で 安 \mathcal{O} に と考 山 寺 日 な 城 を 付 る え 本 石 が Ш 5 寺 あ 両 とす れ る 大 る が 徳 る 0 深 弟 で 年 渇 子 次 仰 石 達 が 望 Ш 無 を 大 通 11 徳 が だ て、 意 勤 が 批 操 年 لح 操 で

移 較 達 が 寺 的 住 لح 世 に い 交 \mathcal{O} 評 落 ず L た 接 に ち 诵 れ 事 \mathcal{O} 点 な 着 に を 便 が 0 き、 L 聞 が た 出 て 時 き 来 ょ 新 ŧ \ \ \ お た に、 人 ょ ىل \mathcal{O} 勤 てバ 思 空 勤 空 操 弘 操 う。 海 لح 海 仁 等 カン が \mathcal{O} 南 勅 6 正 交 年 流 都 命 交 統 + 流 在 で \mathcal{O} が 月 弘 住 を 真 何 仁 \mathcal{O} to 言 時 +気 لح 密 カコ 七 鋭 年 \Diamond 教 b 日 + を \mathcal{O} た 始 に 月 僧 将 ま カン 侶 末 来 0 泊 た 頃 勤 L た たこ Ĺ to 操 カコ 上 \mathbb{Z} カン 灌 互. 訓 لح 史 6 頂 料 い 寺 近 が 授 に に づ 南 築 法 往 移 11 都 が 等 住 た 来 仏 な \mathcal{O} が か 教 L 談 始 不 界 合 ま 約 明 に 判 を だ 0 浸 然 L た 年 が 透 と て 上 居 L L V 思 住 な 勤 る V わ 操 嵯 L ⁷⁴ h た を含 峨 が 時 る。 帝 に、 8 私 \mathcal{O} 最 南 愛 見 澄 Z で 都 顧 ŧ 訓 六 を は 空 寺 宗 受 海 لح \mathcal{O} け 空 が 南 気 7 海 Z 都 鋭 V が 訓 لح \mathcal{O} る 高 寺 は 僧 雄 比 侶 山

す 上 仁 考 ることに 勤 + え 操 兀 5 は 年 弘 れ な 仁 空 ŋ + 月 海 年 لح 更 に 正 \mathcal{O} 宮 に 月 往 緊 中 に 来 密 で 小 が 度 仏 僧 増 が 名 都 えて 増 会 に . 昇 0 L 親 たと 法 任 密 要 Z 度 考 を れ が え 勤 増 5 操 造 L れ 等 東 たと と行 る。 寺 所 思 別 な わ 0 当 れ た に る。 が 任 命さ 淳 갶 和 年 れ 帝 空 た が 海 \mathcal{O} 即 が で、 位 僧 恐 綱 入 6 空 ŋ < 海 L 南 が た 都 重 後 大 用 は 安 さ 寺 れ 共 カン て、 に 6 仏 前 京 教 述 都 界 l た 移 を IJ 如 住 L K た

お \mathcal{O} 鳥 Ŧ. 時 部 操 11 に 南 \mathcal{O} 顔 麓 は 性 を 天 格 合 \mathcal{O} 長 B 兀 わ 塟 生. 廿 列 年 活 た \mathcal{O} 五 態 \mathcal{O} 描 月 度 で 写 に を あ を 入 熟 滅 ろ L ō̈́ 知 て す お る 弘 n 茶 間 毘 仁 柄 に لح 年 付 \mathcal{O} な 頃 時 Z 0 カン 空 n た 6 海 る に が \mathcal{O} が 違 茶 面 い 識 毘 行 な لح に 路 Š す 随 掩 れ 行 涙 ば、 L 貧 た 道 尊 約 可 لح 卑 公 能 + 爛 六 性 لح 肝 年 が は 行 ら間 高 蘭 膠音の い 路 لح 交 涙 な 考 ること 際 を え 掩 は 6 年 1) 月 n 春 尊 に る。 秋 鬼 0 巳 勤 肝 れ 7 操 を 久 深 \mathcal{O} 爛 ま 弟 6 り、 لح カン 子 0) 達 す لح 表 最 現 後 ŧ は لح

摘

さ

れ

て

1

る790

勤

操

 \mathcal{O}

木

小像を写

生

L

たとされ

る。醍

醐

寺

画

像

 \mathcal{O}

写.

真

を見ると柔

和

で

滋

味

に

富

W

だ

顔

貌

で

あ

る。

勤

操

は

方

に

偏

でること

無

 \langle

空海と最

澄に

接したと思わ

れ

終

なったと考える

おわりに

表 最 桓 に L 奏 澄 武 高 仏 と考えら 勤 ここま \mathcal{O} 帝 雄 操 教 不 円 Щ 界 が \mathcal{O} で 頓 崩 寺 人 に 合 柄 ħ 戒 御 で 登 検 _ 教 壇 さ 南 場 は 計 理 れ 建 都 L 空 先 を 立 0 た 海 進 \mathcal{O} 最 事 時、 有 法 لح \Diamond \mathcal{O} 澄 申 力 華 シ た 78 12 が 僧 勤 ン 時、 請 八 南 パ 講 操 勤 に 都仏教界と対立 筀 共 対 \mathcal{O} が シ 操 する、 南 者 は に 伝] に 最 都 が 唯 承 P は 澄 六 通 宗 護命 勤 カコ ľ 人欠席して署名を 5 操 \mathcal{O} 合うよう 最 を首 天 有 0 澄 した後 台 논 姿 力 僧 は 1座とす \mathcal{O} 0 空 交誼 に思 妙 لح ţ 旨 0 海 文通 á \mathcal{O} 橋 わ 入 \mathcal{O} 唐 講 渡 中 L 僧 n 時 演 が に L る。 綱 な を P \mathcal{O} 絶 表 \mathcal{O} か 受け 惟 弘仁 えず、 調 れ 勤 0 整 上 7 操 た ぞ た \mathcal{O} が、 + V は 最 など何 姿と 時 る。 惟 年 澄 か 五. 上 ₹ 10 76° ŧ 重 노 月 桓 れ 勤 な か には + 武 は 操を頼り · と空 0 帝 異 最 九 最 て見 0 な 日 澄 澄 海 指 ŋ 付 に لح える を 対 \mathcal{O} 0) 示 にしてい 援 弾 で、 交流 同 す 750 助 る勤 門 劾 L で 文 延 が 共 た 暦二十 始 は 操 に た様子が に \mathcal{O} 僧 ま な 質 違 配 最 0 朴 ** \ たと 澄 が 慮 で な 年 で 奉 窺 思 あ 獻 柄 わ 天台式 月 0 わ 海 が れ たと +n 良 が る 九 る 帰 い が 日 朝

で な あ ま 海 論 n لح 教 は さ 學と 深 \neg れ +は 0 住 そ な 関 心 \mathcal{O} 係」 論 後 は で三 で لح 独 詳 指 習 しく検 論 [摘さ したが 宗 を第 れて 討 ざ 七 11 れて 要之、 . る。 覺 V 心 発 る。 **不生** 表者 大師 住 干 は は 潟 心 教 に 学 論 師 教 は 配 に 青 当 學 0 を 年 1 L 吉 \mathcal{O} て て 時 11 は 藏 る。 系 \mathcal{O} 門 外 \mathcal{O} 空 説 漢 に 教 海 で 從 指 \mathcal{O} あ る 0 歸 て 論 が 教 で ここに 学 通 は n 0 \equiv 學 素 習 師 養 論 さ は 0 系 説 れ \mathcal{O} 干 を 7 ŧ 潟 紹 あ \mathcal{O} 龍 0 は 介 祥 たして本 た 殆 11 تلح 弘 Š 見 法 論 程 當 大 度 師

以上

并

序 追 考 記 本 に 解 論 釈 は 亚 等 成二 部 + 付 加 兀 年 L て 度 完 密 成 教 た 研 ŧ 究 会学 0) で あ 術 大会(二) 一二年 六 月 九 日 発 表 た 故 贈 僧 正 勤 操 大 影 讚

が仏 仏 できた限りでは次のような注釈書がある。 え を ほ め たたえる韻文体 読 \mathcal{O} 最 後 に 唱 え

道 應 略 注 昌 』(または『性靈集私注』)覺蓮坊聖範口述眞辦筆記。十巻二帖。 書 館 藏『 性 靈集 略 哈注』(翻 印)』(『和漢比較文學の周 辺』平成六年八月刊 貞應二年(一二三三)成立。 汲古書院) に 依拠。 原 本は 本 論 は

لح 表 記記す 集 注 蓮 (())成立。 靈 集 注 (翻 寺

キに 、スト ょ れ 』二期・第十二巻。 集聞性 注』に対し、「広 見 撰者不詳·十冊 唐 注』現在七冊(十巻 房 明 平 玄 中成十九年二月四公序題・十巻。一 注」と言うべき「聖範集注」と言九年二月刊・臨川書店。)に依拠。や十巻。正應三年(一二九〇)成立。 中七 ・観智院本を底本とする。実見したが、奥書に筆写年月の記載無く、写送~九巻闕)東寺・観智院本がある。—本論では『集注』と表記する。りべき「聖範集注」と言えるものかも知れないとされている。筆者が実 闕の巻三は大谷大学博。原本は筆者未見。『眞 物福 館蔵で補 寺 性 っている。 実見し 刻) Щ 崎 誠氏真 た 同 の福 系 統 解善 題本

とさ (3) などのという。

藏。奥書によれば、十巻本は慶安元年(一六四八)十月、高野二階堂高祖院秀盛によって写される。 に、 金剛峯寺 櫻池院春 清房 雄仟によって写される。 十巻本を底本とする。 、る。―本論では『東〒♪ "3。六巻本は貞享三年(一六

六二一)撰 安二年(一六四 述。 六四九)撰述。(『真言宗全寛永八年(一六三一)刊行。 主書』第四-本論では は『集鈔』 所と 別収。一九三と表記する。 九三

持明院蔵『性靈集聞書』は四冊本で『世 一次)十月~四年(一六八七)四月の間に、 八六)十月~四年(一六八七)四月の間に、 八六)十月~四年(一六八七)四月の間に、 八六)十月~四年(一六八七)四月の間に、 と表記する。 ⑤『性靈集健蒙』運敞(一六一四~一本論では で『性靈集開書』選者不詳・六冊。綴哲 で『性靈集聞書』選者不詳・六冊。綴哲 で『性靈集聞書』と表記する。。 ⑤『性靈集聞書』と表記する。。 ⑤『性靈集聞書』と表記する。。 ②『性靈集聞書』と表記する。。 ②『性靈集別聞書』と表記する。。 ②『性靈集別聞書』と表記する。。 ②『性靈集別聞書』と表記する。③ 本論では『真別聞書』と表記する。③ 本論では『真別聞書』と表記する。③ 本論では『典別報書』は四冊本で『世 と表記する。 L 7 を基本に、最後は隆光(一六五九~一七二四)談を付加してエョヤ明こ扁裏ヾ‐ぃ‐ぃっ。eゥ・‐ゅ‐‐‐‐‐‐‐‐‐っっっ。『真別聞書』と表記する。③の『性靈集聞書』と全く異なる内容である。新義真言の持明院眞譽(一〇六九~一一三七)か第六冊・巻九巻十。高野山真別処円通律寺蔵。現物は高野山大学図書館に寄託されている。マイクロフィルムがある。―― 二年、『真別聞書』選者不詳・六冊。綴葉装。第一冊・序。第二冊・巻一巻二。第三冊・巻三巻四。第四冊・巻五巻六。第五冊・巻二書宗全書刊行會)――本論では『便蒙』と表記する。

たと同 古 呉皇甫謐編纂『黄帝同全書附巻の解題(私記』撰者不詳。二 帝三 帝三部鍼灸甲乙經』巻之三(十二巻・医道(担当小田慈舟氏)で記載されている。二巻本。(『真言宗全書』第四十一巻所収 医道之日 ·本論では『私記』と表記する。『便蒙』が引用されており、A 本社 昭 和十六年刊)に 「百會一二八名二三陽五 恐ら 文政頃(一八一八)に 在下

五~二八二)六朝晋・ 五. 央 旋 毛 安定朝那(甘粛省)の人。字は士安。号は玄晏先生、中陥ニシデ可止」容が指す」とあり、頭頂のつむじの あ る 指 0 大 きさ 位 \mathcal{O} 4 \mathcal{O} 個 所 とし て る。 皇

帝の時、太醫侍御となる。では確認できない。同書は『日本國見在書目録』に著録されている。楊上善(五七五?~六七〇)育・雪つ……、立ながら、述されていると考えられる「百會」の此の説明文は適切で、空海が参照して用いた可能性が高いと思われる。しかしながら、述されていない。杲寶在世には全巻が存在したと思われるが、運敞在世の江戸中期には散逸していたと考えられる。散逸した巻数れていない。杲寶在世には全巻が存在したと思われるが、運敞在世の江戸中期には散逸していたと考えられる。散逸した巻数れていない。杲寶在世には全巻が存在したと思われるが、運敞在世の江戸中期には散逸していたと考えられる。散逸した巻かれていない。杲寶在世には全巻が存在したと思われるが、正常の江戸中期には散逸していたと考えられる。 かしながら、現在収逸した巻数に記 記 載載さ 7

5 『摩訶・ 止 觀』巻第七下。『大正 新 脩大藏經』 第四十 六 巻。 No. 九 一 一 • 九 七頁 下 段

代に 6 三論 L て、 盛んに研究された。 空・中道を説く。中間宗…中国十三宗・南 中国には晋代に用都六宗の一。 代に鳩摩羅什が伝え、隋の吉一。龍樹(ナガールジュナ)撰 □藏で大: 中 - 論 『 成。 "十二門論』と弟子の提婆(デー 日 本には 六二五 年高麗 僧慧灌に べ により)撰 \neg 伝 百 いえら 論 れ、 を 拠 奈り 良所 時に

[] [妙法 Ō 律典など多数の仏典を訳し、中国仏教に多大の影響を与えた。『妙法蓮華經』『阿弥陀經』など主要な大乗経典と『大智度論』『 中 - 論 | 『 十二門 論 ||『百論』など三||父はインド人。 論』など三 五・六五二頁下段)の 論 仏 宗典 の 基本仏典や『十

本名クマーラジーバ、羅什とも云う。

亀茲國の人、

0

大翻訳家、『大品般若

誦

律

7「童壽」(三四四?~三五〇?)

。「無起智」の記述は世親造玄奘訳『辯中邊論』「辯無上乘品第七」(『大正新脩大藏經』三十一巻・№一六○○・▷治↘目ッ故¨造┐詣ҳ良醫゚、是ン時良醫以┐金蜱゚刮៉゚其ン眼膜゚゚。」を引いて、「以↘法ッ喩┐金蜱↑也」としている。。『便蒙』は『大般涅槃經』巻第八「如来性品第十二」(『大正新脩大藏經』第十二巻・№三七五・六五二頁下段)◎ 兀 七 有 六 _ 盲 頁 中 人 爲

5 K 智 藏 |無生智無起智無自性智」とある。 (生没年不詳)。 天武 →七四四)俗姓額田氏・大和国添下郡の人。大安寺僧。大寶二年(七○二)入唐。(天皇二年(六七三)大僧正補任。日本三論宗第二伝。弟子に大安寺道慈、元興年不詳)。中国呉の人? 父福亮に連れられて来日。僧となり入唐して、三論 元三興論 宗寺智光・1 端宗宗祖の 元・礼光など。 祖の吉藏に奥旨な を 学 び 帰 玉 法 隆 寺

こに 道 天平十六年十月二日入滅。三論宗第三伝。 慈(?~七四四)俗姓額田氏・大和国添下郡の人。大安寺僧。 天平元年十月律師。 長 安・ 西 I明寺 止 住。 老二 年(七 八)帰

12殿屈百 指 |僧雩」(『性靈集』巻六)では淳和帝を「皇天ノ所」兒チスル、蒼生ノ所」父チスル、陽谷之帝」と表現して『歸』『三教指歸』の「假名乞兒論」に「刹那幻ノ゙サーク住バ於南閻浮堤ノ陽谷ザ」と早くから用いている。 の可能性が高い。文脈からい。陽谷之帝」と表現している。 また 天長 (皇帝

14 が 13 正しいと思われる。『定本弘法大師全集 ・全集』は「幽蹟」にしているが、 読み下しは 幽賾」とする。 用例の見当たらない 語 一句で、 誤 写 の えば 紁

賾

大師 全 詞 享 にしているが、 意味が 通 ľ な 語 句 で、 誤 写 の 口 能 性 が 高 V) 文脈 か 6 V えば 洞 享 が 正

 18

下 L は 洞 享」とす る。 後 0 解 釈 で 検 討す る

!樹(一五○~二五○頃) 南インドの人。インド名ナーガールジュナ。龍對黄洋『日本佛教史講話』「奈良佛教の繼續」・辻善之助『日本佛教史・ 第一 参 作照

インド名ナー 龍猛とも 一巻上世の一巻上世の 主要著 中 論 + 大 智 度

』『十住毘 上婆沙 論

識二十論』『阿毘達磨倶舎論』『大乗成業論』 .親(四○○~四八○頃) 北インド・ペシ ヤ 1 ワ ル 0) イ ンド名ヴァスバンド ゥ。 天親とも 云う。 主 要 著 作 唯 識 · 頌 二

『大乗阿 毘達 磨集論』

無著(三九五~四七〇頃)

北インド・ペシャー

ワル

の 人。

インド名アサ

ン ガ。

世

親

0

実

兄。

主

要

著

作

摂

大

乗

論

顕

揚

聖

19の 事 である。 『大正新 脩大藏 經 巻 No. 五. 六 五. に 所

2120셨(五三○~五六一) 南インドの人。インド名ダルマパーラ。『中論』・『大正新脩大藏經』第三十巻・№一五六四.順中論』は『順中論義入大般若波羅蜜經初品法門翻譯之記』の 主要著作 成 唯 識 論 _ 成 唯 識 寶 生 論 \neg 大 乗 廣 百 論

22 護法(五三〇~五六一) 『大乗廣百論釋論』は『大正新脩大藏經』第三十巻・Ni一五七一に所載

23 『四百論』の全訳は漢訳にない。後半の八品が『廣百論本』(『大正新脩大藏經』第三十巻・№一五七○)として所載されている。 提婆(一七○~二七○頃) 南インドの人。インド名アーリヤ デーバ。漢訳名聖天。 主要著作『百論』『廣百 論(四 百 論)』『百字論』

"孔子家語』 「辯樂解第三十五」に 可…以阜、民之財、兮。」とある。 「昔者、 舜彈二五 並琴 √、 造;;南風之詩 _ ° 其 詩 旦 南 F風之熏 兮、 可 =' 以 解言吾 民 | 之にかり

 26 晏嬰(前五八九?~前五○○?) 言動は『晏子春秋』『春秋左氏傳』『史記』『蒙求』などに記晏嬰(前五八九?~前五○○?) 春秋時代・夷維(山東省)の・ 述され、 字平 無使。 灬欲で: 齊の 節 () 大夫。 行 の齊 生悪 公・ は 人口に 荘 公・ に膾炙し 景 公公に て ている。『晏子春秋に仕えて業績を上ば 『晏子春秋』

「守雌」の典 にある。 故 は 老子 ,道德經』「反朴第二十八」 に 「知二.其 雄 守 其 雌 爲 _ 天 下 爲 二天下 · 谿 徳 不 離 復

 28 羅云忍辱經』(『大正新脩大藏經』第十 羅雲とも書く。 が尊の 息 子のラーフラ(羅睺羅)の事である。 -大弟子 の一人として忍辱第一とされ 7 11 る。 その 言

 29 『大智度論』「初品中菩薩功德釋論第十」『大正新脩大藏經』第二十五巻・№一維云忍辱經』(『大正新脩大藏經』第十四巻・№五○○)に記述されている。 五. 0 九・ 九六頁下段

『辯中邊論』巻中「辯真実品第三」に「空有三者。 №一六〇〇・四六九頁上段)。『成唯識論』では巻八にほぼ同文で記述されている。(『大正新脩大藏經』第三十一巻・如妄所執不如是有。非一切種性全無故。三自性空。謂圓成實。二空所顯為。自性故。」とある。(『大正新脩大藏經』第 一無性空。 謂遍計所執。 此 無理 趣 可說為有。 由此非有說為空故。

Ŧī. 七

『大正 經』第十 No. 五. 頁 中

「悩によって生死輪廻する事。(『大正新脩大藏經』第三十四巻。 No一七一八・一二七頁上段)「選華經文句』巻第九下「釋壽量品」に「滅影澄神乘之終也。滅影謂息迹。澄神則明本。故迹

洂 無

常

而

本常也」

とあ

る。

迹

33 .「入山興」第二十九句に「如夢如泡電影賓」と用いている。遊山慕仙詩・第三十七・三十八句に「一身獨生没、電影是無 :: 卷下に「知法如電 影、 究竟菩薩道」(『大正新脩大藏經』第十二巻・№三六〇・二七三頁上 電影是無常」、「大夫笠佐衛佐爲亡室造大日楨像願文」に「霜露易消電影 段)とある。 空 難

」、「入山興」

35 『孝子傳』は中国では逸失したが、中国のテキストからの転載とされている『孝子傳』が我が国に34 空海は「爲忠延師先妣講理趣經表白文」(『性靈集』巻八)に「弟子履」霜ッ之感、千ジ爛ッ゚、我肝ッ゚」, 肝』と用 陽明文庫本と京大所有 いて いる。 の

日丁蘭事「母ニ孝アリ、母亡ッ刻」ッ末ッ爲。母ト事」之ニ、蘭ゥ婦誤ッ以.36 『便蒙』は『蒙求』からの引用とはしてないが、『蒙求』第四 家本の二種が伝存している。 蘭ヵ婦誤テ以」火焼、母ノ面、、應、時ニ髪落テ如シ割クカ。」 一五句「丁蘭 『刻木』と同文の 次の文章を記載 して V る。 孝子 清

37 十一巻・No二〇八七・八九八頁上段) 雕刻栴檀。如來自天宮還也、刻檀之俛 『大唐西域記』巻第五・憍賞彌國に「初、 刻檀之像起迎世尊、 如來成正覺已、 世尊慰曰。 教化勞耶?開導末世、 上昇天宮、為母說法、三月不還。 寔此為冀。」とある。 其王思慕、 (『大正新脩大藏經』 願圖形像。:: 親 第和、五、

『便蒙』は「優闐國王及『波斯匿王思』慕 アル誤ッ者ノカメ乎」と記述している。 佛 徳一。 刻が檀り 書い能ニ リテ 寫ニア 佛 形。 佛像之興ッ始ニ 於此一矣。 由 レラ 所 以

40 L 39 ており、 勤操の出身地・姓などにつき、 空海はしばしば讃・表白・願文・碑等の依頼を受けて代作等をしている。 例えば「沙門勝道歴山水瑩玄珠碑」は、 池田源太「石淵寺勤操と平安仏教」で詳しく考証されている。この論文の最大の問題点は 面識のない人間と風景などについて、 自身の体験ではないことでも 依頼者から聞き取り作成している。 活写できる想像力 を 遺

41 『近江輿地志略』(寒川辰清撰・享保十九年(一七三四)成立。校定・頭注し大正四年(一九一五)十二月復刊。)「蒲生郡 告」類を鵜呑みして、空海の得度・虚空藏求聞持法の伝授等を史実として、 大慈山西明寺」巻之六十五の頭注に「大安寺三綱記曰…道寧法師開基、 信靈大徳中興神 勤操の履歴に付加している事である。 龜 五年始號來田綿寺とこれもとの 西 西 明 明寺な 寺

るべし」とある。 本文に「春秋七十夏臈四十七」とあり、夏臈は具足戒を受けた時から 大慈山西明寺は、 現在は臨済宗永源寺派の寺である。 勘定するので、 逆算すると二十四歳で具足戒を受けた事

44 「古代仏教における山林修行とその意義」を参照

(七二九~八一二) 俗姓 **垣**恵賀連 氏・ 河 内国 錦 部 郡 の 大安寺 僧。 天平元年 出 生。 弘仁三 年 八月二十三日 1入滅。 弟子 に 安 澄

45 本後 弘仁四 年 正 一月戊辰の条に 大法師 位 勤操為 律 師」とあ

元亨釋書』虎関 師 撰 · 一七巻。元亨二 年(一三二一)成立。(『大日本仏教全書』 一 0

47

|野黄洋『日本佛教史講話』十一「奈良佛教の継続」五二五頁参照。

嘉元四年(一三○六)成立}(『大日本佛教全書』一○五巻・一九一五年刊)によれば、鑑真(六八八~七六三)を第一和上として、東大弘仁七年五月十日に少僧都、弘仁十四年十二月三日に大僧都となる。『律宗瓊鑑章』巻第六 (凝然撰。六十巻中第六巻のみ現存。4º 長惠(?~八二六)は生年・出身地・俗姓・本寺など全て不詳。『僧綱補任』によれば、律宗で弘仁元年九月甲寅(十三)日に律師。 48 慶 俊(生没年不詳)。 俗姓葛(藤)井氏・河内国丹比郡の人。大安寺僧。三論を道慈に学ぶ。 寶龜元 年(七七〇)八月

ているが、間違いであろう。以上記載した史料以外には、長惠の記述は見出せない。年(一七〇一)成立}(『大日本佛教全書』一〇五巻・一九一五年刊)の巻末の血脈系統図には、長惠を豐安の弟子の道静の弟子としと考えられる。法進か如寶・思託等の鑑真随行の弟子のいずれかに入門したと思われる。後に義澄撰『招提千歳傳記』(元禄十四 豐安・昌禪は如寶の弟子である。長惠が少僧都に補任された同日に豐安が初めて律師に補任されているので、長惠が豐安より年長 寺法進(七○九~七七八)を第二和上、薬師寺如寶(?~八一五)を第三和上、元興寺昌禪(生没年不詳)を第四和上、唐招提寺豐安(七 六四~八四○)を第五和上、興福寺長惠を第六和上として、南都七大寺に夫々律宗が確立したと記述している(三九頁)。この中で、

空海が天長元年に造東寺所別当に補任された事は史実であるとせねばならない。 載された次のような太政官符写しが残されており、 信憑性が高いと考える。 正史など逸失し、 確証はないが、『大通寺文書』

太政官符 造東寺所

任右 》議行正四位下守右大辨勳六等伴宿彌國道 從六這造西寺所別當之替補任如件者、所宜承知、符到奉這被右大臣宣偁、奉勅、件人彼所前別當大僧都傳燈、少僧都傳燈大法師位空聚 大法 師

位

長 惠、

遷

是 本 行 、 右 大史安道 宿 禰 副 雄

天長元年六月十六日

参

同 月二十六日奉行

本 紀 略 天長四年五月 (庚午(十日)の条に 「有勅、 贈僧 正」と記載され てい る。

52 八月発行。 「政事 要 略 惟宗允 元 完 撰、 長保四年(一〇〇二)成立、 百三十巻 中 現存二十五 巻。『國史大系』 第二十八巻。 吉 Ш 弘文 館 昭

『三寶繪 源爲憲撰、 永観二 |年(九八四)成立、上中下三巻。『新日本古典文学大系』三十一. 岩波書店 九 九 七 年 九月発行

- |勤操僧都画像について」参照(『南都仏教史の院の研究』「石淵寺」八四頁を参照。 研 究 一六四 0
- の四種がある。 は『定本弘法大師 全集』第七巻に 収載さ れて いる。 『太政官符 案幷 遺 告』『 御 遺 告二 + Ŧī. 4条』『 遺 告員 然大 徳

頁

- 57 内孝 「御遺告の成立過程」(『密 教学会報』第三五 号 • 平 成 凢 年三月)を
- 62 66 前 『保 平 ま の 大 五 法 で 滝 8 ・「遺告類」の成立年代については、先の武内論文では四種の中で『御遺告二十五条』が最初に作成されたと指摘され-の条の文意を記載している。本文は『遺告』「初示成立由縁起第一」の槇尾山の剃髪の時の記述と同じ文章が記載され の間に最初の遺告類が成立したと考えている。 大安寺住侶記』を斟酌すると、更に遡って、西暦九六二年以前としなければならない。 |法皇作『請賜諡号表』(『弘法大師傳全集』第一巻・㈱ピタカ・一九三五年初版)であり、勤操からの伝授とする最古の史料が康 での間と言える(一四五頁)。とされている。虚空藏求聞持法の伝授が一沙門とされている最新の史料が延喜十八年(九一九)の寛 権 年(九六九)以 『扶桑略記』(伝皇圓撰。寛治八年(一○九四)~嘉承二(一一○七)の間に成立。 現・ 年(九六八)『金剛峰寺建立修業縁起』(『弘法大師傳全集』第一巻・㈱ピタカ・一九三五年初版)である。また、次に検討する 第二節空海請雨伝承の展開」では、『御遺告』記載の空海請雨伝承の成立年代は延喜八年(九○八)から長暦二年(一○三八) 前の成立とされている。 籔元晶『雨乞儀礼の成立と展開』(岩田書店・二〇〇二年十二月刊)「第二章善如 全三十巻中十六巻と抄 従って、 筆者は九一九年以降九六二年 記若干が トが記載されている。〒が現存}の延暦十二 龍 て、安和 配王と清
 - 日本)史講話』「奈良佛教の繼續」 五五三頁~五
- 『大安寺』
- 63 64 池 田 源 『太「石淵寺勤操と平安仏教」『南都仏教』第五号・三七頁参照。《寺住侶記』の記述とほぼ同文の文章「須』吾弟子後生門徒等以!!彼寺 | 爲『本寺』、仕サタ(寺住侶記』撰者不詳。一巻。應和二年五月十一日記。『大日本佛教全書』百十八巻所「仏教史講話』「奈良佛教の繼續」五五三頁~五五五頁参照。 世奉る釋る 迦 大師 で 記 述 さ れ て る。
- の仏 絵に 玄 しれた仏 朝 大きな影響を与えた。永延元年(九八七)に東大寺大仏殿の曼荼羅図を修復したとの記録が残っている。 像等の 年・姓・出身地など全て不詳。平安中期の絵仏師。元興寺住僧。 写生に励んだと伝えられている。 源朝・ 玄超とも書く。 玄朝図様の創案者で後世 絵 の 修 練の為に当 の
- 99 篇上 ť 大寺巡禮記 院画像については『南都仏教史の研究下』「醍 巻」(中央公論 私 記』大江親通(?~一一五一)撰。 美術出版・一九七二年)に所収。 配酬寺蔵 保延六年(一一四○)~仁平元年(一一五一)頃 勤操僧都画 「像について」の 六四四頁~六四八頁に記述され 成立。 『校刊美術 7 史料』「寺 る
- たので障子も伝存していない。 七大寺巡禮記私 障子は 存していない。現在の六師像は鎌倉初期の文治五年(一一八九)に南円堂の再建と共に仏師康慶一門の手で再記』に記述された法相六師像等は、その後、治承四年(一一八〇)の平氏による南都焼き討ちで南円堂と共に :興されず、 現在では確認できな 南円堂 は 藤 原冬嗣が弘 四 年 八 一三に 建 <u>\</u> た で、 空海 はと冬 興焼

なく真 (偽は不 っであ 子 以 外 に ŧ 空 海 伝 承 \mathcal{O} 事 柄 例 えば 鎮 壇 一法を i 修 し たと カコ 灯 籠 \mathcal{O} 銘 を 異し したとか がある が、 IE. 史 など 確 実な史料

さ てい 見曰、此 弟 子傳』(二 【児後起レ予 巻・貞享 者 也。 元年(一六八 九 歳 附 大師 四 1)八月 0 去投 廿七 ...大安寺勤 日 筆 記。 操 続 _ _° Þ 群 とあ 書類 る。 從 その 第三史傳部 後の弟子 高 伝 等に Ш は この 南 院 伝 承が 智泉大 踏襲

69伝・弟子伝等に の 踏襲されている 佐伯 氏。 讃 州 人。 初 事二大 安寺泰基 _ 學 唯 識 __ ₀ 後 從二弘 法 大師 稟 兩 部 密法 _ لح あ ŋ 以 後

で 泰 基 大安寺の泰基は同名異人であるか、或いは泰基が大安寺から東大寺に移ったかである。もので、史料価値が高く史実として考えられる。惠運は後に實慧に師事し真言密教を相 が「本師 本 運が密教を實恵に学んだと考えられる。 が本寺ではない大安寺に居住していた可能性が低いと考えられる。 渾 大寺 東大寺泰基大法師」と記述したのは、最初の 泰基大法師幷律師仲繼大法師 伽 記之所、 貞観 九年(八 遊於離讖無境之道、・・・」と記述されている。この 師が泰基 六 七)六月十 坐で、 2る。法相では實恵は泰基門の兄弟子になる。師の泰基の繋泰基の本寺が東大寺あることを示している。實恵の入寺の 日 事し真言密教を相承するが、これに従えば、 記。 『平安 遺 文 泰基が同時に二名いたとは考えら 第 巻 • 六 兀 文書は に 惠運 は自身が作る 東 大夫寺 れず、惠 \mathcal{O} - 成した 繋がり 泰基と

年三月 述されているので、 弘用収 71 これらの灌頂については、『叡山大師傳』 {釋一 刷• いてい を行っている。 世によって、京都西郊外に灌頂壇を創建し、先に灌頂を受けた八大徳に豐安・靈福・泰命を加えて九月十五日までに二回世によって、京都西郊外に灌頂壇を創建し、先に灌頂を受けた八大徳に豐安・靈福・泰命を加えて九月十五日までに二回 載。)によれば以下 第一刷。)を参照。吉川弘文館)と三崎 る。高雄山 、、この時勤操と修圓は桓武帝の護持僧であった事が判る。 佐伯有清 同月十六日に「公験」を与えられた。「内侍宣」に「然石川檉生二禪師 寺 ・の通りである。 \dot{o} 時勤操と修圓は桓武帝の護持僧であった事が判る。 灌頂は九月一日に行われ、道證・修 義 泉 叡 Ш 一日に行われ、道證・修圓・勤操・正能・正秀・廣圓等が受ける。九月上延暦二十四年八月二十七日付の「内侍宣」に従い、法壇が建立され、最 大師伝」(『岩波講座日本文学と仏教』第一巻「第二部 乗忠撰、一 巻。 最 澄 强入滅(八 (八二)後の数年内 『傳教大師伝の 者、 日本仏教の人間 宿結芳縁、 に成 立。 九月上 研究』(一九九二年十月第 守護朕躬。」(二二頁)と記 闘しに 双澄が. 旬に 大師 将 全 収 勅を奉じ 載。 来した法具を 1目の灌 た和気 五. 九

二月 て私 兀 nなもの 日に 弘 仁三年十 0のである。延暦二十四年の灌頂で造立された灌頂壇等の施設が恐らく残っていたと1四年三月六日に最澄の弟子達十九名に金剛界持明灌頂を行った。これらの灌頂は最21最澄以下百七十一名に胎蔵界持明灌頂を行った大掛かりなものであった。空海自筆 この三回の灌頂には、 <u>-</u> 月 + 茁 日 に最 浴 南都六宗の主だった僧侶 和気真綱 和気仲 世 壇等の施設が恐らく残っていたと考えら は勤操も含めて誰も参加していない。 美 濃 種 一人の四 日名に金 副界 結 縁 灌頂を行った。 澄が行った勅命によるものでなく、 の「灌頂暦名」 れ、 空海 二回 はそれらを活用し が残されている。 目 弘仁三年十

内 侍 宣 に 記 遺載さ れた 石 ΪΪ 檉 生二 禪 師 に 0 V 福山 E 敏男 『日本建築史の研究』 室 生 \mathcal{O} 建 <u>\f</u> 年 代

拠は十分であるとは言えないが、他に代えるべき史料等もなく、勤操説を取る事にしたい。 からの 似工教大師傳の研究』では、『忽恵帖』記載の「石川大徳は、石川禪師と同様に勤操のことか(三六九頁)」とされている。この説の根そらく同郡石川(橿原市石川町)の人だったと思われる」とされ、石川禪師を勤操とされている。これらの説を踏まえて、先の『傳雄・薗田香融校注『最澄』(『日本思想大系』4・岩波書店・昭和四十九年五月第一版)の巻末注の「勤操」の項(四〇二頁)で「お生禪師とは修圓を指すもののようである。(四五一頁)」とされている。しかしはっきりとした根拠は示されていない。次に安藤俊 1圓を指すもののようである。(四五一頁)」とされている。7刊・桑名文星堂)に「内侍宣」の当該の文を引き「その前 文を引き「その前後の文から考えると石川禪師とは石淵 寺 の勤 を指

3 る山るれのる拠教 る る。 最澄でさえ空海の乙訓寺への移住を知っていたのであるから、南都の僧侶達は当然空海の移住を当初より存知していたと考えら最澄でさえ空海の乙訓寺、頂謁空海阿闍梨。」とある。叡山上洋63年910月仁三年十1月日日代書館に「右扇澄」去月二十七日以頭陀次、宿乙訓寺、頂謁空海阿闍梨。」とある。叡山

出版社・平 平成二十二年二月刊)を参照。いて、拙著『漢詩を通じて弘 法 大師 空海 の 生涯を繙く』 一第一 編 • 入唐 時 代 0 漢 詩、 第一 章 空海 :と馬 総 0 離合詩」 (高

『叡山· 大師傳』 参照。

主 73 記載の安藤俊雄・薗田香融校注『最澄』の巻末注の「勤操」この弾劾文は『傳教大師全集』第一「顯戒論」に記載されている。佐伯有清『最澄と空海―交友の軌跡』(吉川弘文館・平成十年一月26年)。―― 刊)の「I・ 2 最 澄と空海 と勤 操 を 照

操」 の 項(四〇二頁)参 照

̈́Ρ ド 勤操の履歴 事 績 7操の伝承、 勤操の木像、 空海と勤